

宇宙維新 黄金の夜明け（後編）

序

前編のあらすじ。太陽系最外殻を約 3,600 年の超楕円軌道周期で公転している惑星ニビルは、太陽に近付いて来る際に、惑星系に多大な影響を及ぼした。また、ニビル自体もニビル人同士のエゴのぶつかり合いから存続の危機に瀕し、それにはニビルにはほとんど存在しないが、地球には豊富に存在する金が重要な役割を果たすことが判明し、ニビル人は地球に降臨した。彼らをアヌンナキと言う。

金の採掘のために多くのアヌンナキが降臨したが、その重労働に耐え切れなくなっていた。そこで、彼らの中で後に地球の主と呼ばれたエンキが 1 つの考えを提案した。遺伝的にアヌンナキと類似している“人類の源”から労働者を創り出し、それに労働させよう、と。太古の地球にはニビルの衛星が衝突し、偶然にも生物学的にニビルと地球は類似していたのである。この考えには賛否両論あったものの、結局、原始人類は彼らの手によって創成された。そして、アヌンナキは原始人類に“知恵”を授け、後にアヌンナキは人類に対して「神」「神々」として振る舞うようになったのである。

しかし、人類に知恵がついて神々にも意見するようになってきた時期、またもやニビルが接近した。この時は、南極大陸の巨大な氷塊が滑り落ち、大惨事となった。エンキと対立する弟で地球の総督エンリルは、この大惨事を利用して人類を滅ぼそうとしたが、エンキの策により、人類と他の生物種の絶滅は免れた。

エンリルはこれを宇宙創造のエネルギー、“万物の創造主”の御意思と認め、人類が繁殖することを許した。そして、人類初の文明が誕生した。シュメール文明である。

しかし、神々には多くのエゴが存在した。最初は神々同士の争いだったが、いつしかそれが人類に受け継がれ、人類がアヌンナキのエゴという十字架を背負わされることになったのである。そして、遂に“禁断の兵器”が使用され、シュメールだけではなく、周辺のエジプトやインダスまで壊滅的な打撃を受けた。唯一、エゴむき出しのエンキの長男マルドゥクの支配するバビリ（バビロン）を除いて。

以下、これ以後の物語である。

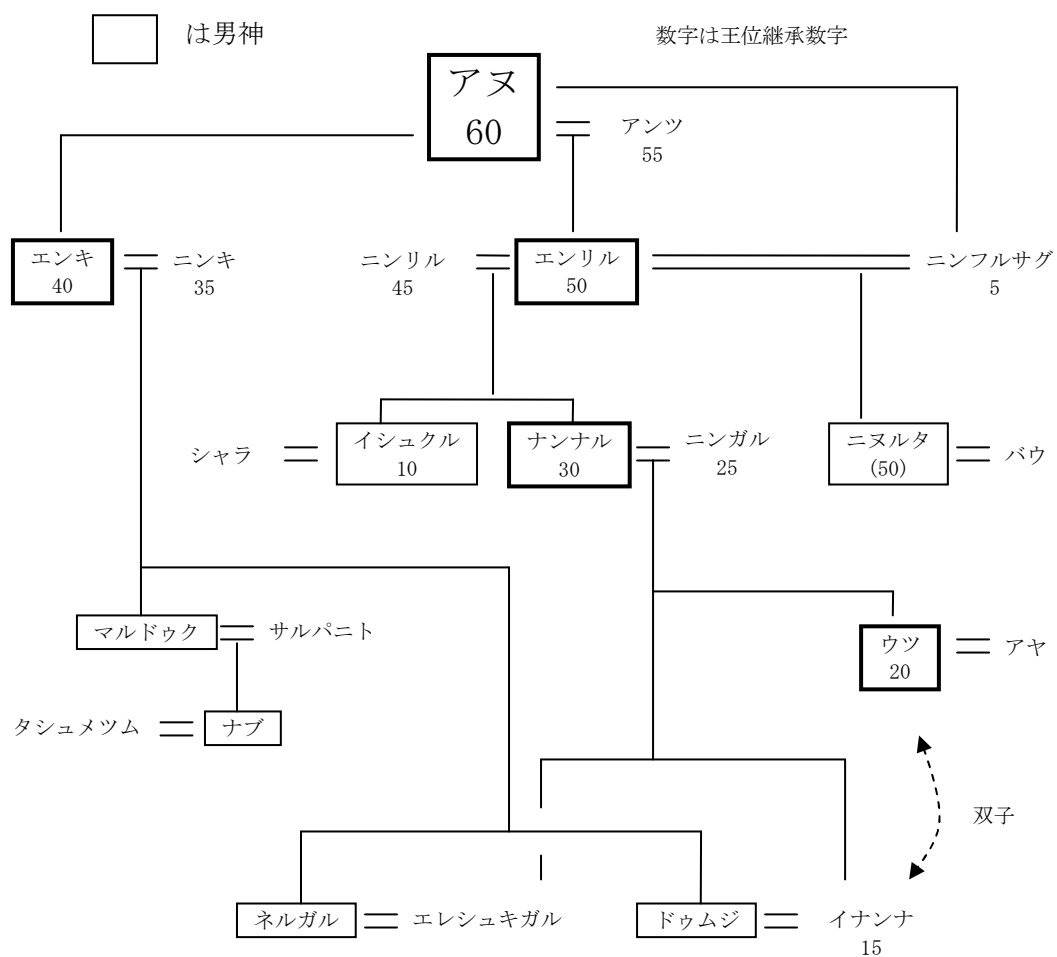
・建（タケル）：

降臨した神々のために新たに建造された神殿に御奉仕する、日本の古代大王家、すなわち、古代シュメールに遡る大王家の血を引く若い神官。通称ケン。

・ひかり：

建の恋人。何でも知りたがり屋。建と同族で、ひかりは建の本家筋の末裔。建は分家。

<神々の系図>



<目次>

序

神々の系図

1：核戦争後のシュメールの末裔たち

(1)バビロニア帝国（バビリ）：5

(2)ミタンニとヒッタイト：7

(3)インダス文明

①大まかな歴史の流れと輪廻転生：10

②ヒンズー教の主神とインダス・カバラ：13

③シヴァと牛頭天王：20

④その他の神々：22

⑤聖仙リシ：23

⑥タントリズム：24

⑦ヨーガ：25

⑧マントラ：29

⑨般若心経：31

⑩ヤントラ：36

(4)カナン（フェニキア）

①歴史：42

②北イスラエル王国と南ユダ王国の本当の関係：45

③フェニックス：48

④都市：52

⑤文化：53

⑥宗教：55

⑦火葬と生贄：61

(5)ここまでの流れ：63

2：中東以外の世界

(1)支那：64

(2)環太平洋文明圏：66

3：日本への移住

(1)エフライム族の渡来：70

(2)新たな祭祀：73

(3)徐福の渡来：77

(4)統一王国への道と新羅建国：81

(5)邪馬台国（前期邪馬台国）建国：83

(6)大邪馬台国（後期邪馬台国）建国：88

4：弥生時代前後の中東

- (1) イエスの誕生：94
- (2) イエスの磔刑と復活：98
- (3) 追放された者たち：100

5：秦氏の渡来

- (1) イエスの使徒の一団：103
- (2) 秦氏渡来と王権委譲（出雲の悲劇）：104
- (3) 大和朝廷：108
- (4) 三種の神器の制定と新たな歴史創り：117

6：ニビル崩壊：125

7：“終わり” に向かって：126

8：黄金の夜明け：130

あとがき

1：核戦争後のシュメールの末裔たち

第 62 回式年遷宮後の西暦 2, 01×年、イエスと神々降臨後の地球。降臨後、初の新嘗祭が近付いているある日のこと。神々の御宣託により、混乱したかつての聖地エルサレムに赴いて人々を導き、ようやく任務が終了して帰国した建。

とあるカフェバーにて。

ひかり：お帰り、ケン、待ちわびたわ！

建：ただいま。半年近く君に会えなくて、寂しかったな…。

ひかり：わ・た・し・も！で、エルサレムはどうだったの？

建：大混乱だったが、エルサレムの司令官だった太陽神ウツ様のご指導の下、人々の思想的混乱はようやく収まり、人類史の真相を理解し始め、新たな国造りが始まったよ。

ひかり：それは良かったわね。

建：ところで、歴史の勉強はしっかりやった？

ひかり：ケンが行く前に話してくれたことを復習して、国史だけではなく、世界史もそこそこに…。

建：じゃあ、飲み込みは早そうだね？！

ひかり：だと良いけど…。早く続きをお願い！

(1) バビロニア帝国（バビリ）

あの“大いなる惨禍”の後、“邪悪な風”を免れたバビリ（バビロニア）はマルドゥクが最高権力を宣言したように、彼の帝国となった。そのため、宣言通り、エンリルとニヌルタは海の向こうの土地へ旅立ち、ニビルのために金を手するという特命ミッションを遂行した。また、マルドゥク一派を除く他の神々も、エンリルとニヌルタに追随した。エンキと僅かな神々を除いて。

マルドゥクと彼の信奉者であるイギギの一派は、相変わらずエゴと欲望で歪んだままだった。自らの帝国を手中にしたマルドゥクは、神話・伝承の改竄を進めた。天地創造神話「エヌマ・エリシュ」ではニビルのことを“マルドゥク”と呼ばせ、ニヌルタについてはすべて、エンリルについてはほとんどの内容が削除された。エンリル系に対して、相当な恨みを抱いていたためである。これにより、十分な知識が与えられていなかったこの地域の人々は誤解し、曲解し、ありもしない妄想が妄想を生み出す事態となった。

様々な儀式、とりわけ新年を祝う儀式もマルドゥク流に変えられ、性的な節制は不幸の原因になるとして避けられ、性を拒む女性は悪魔の手先とされた。それ故、“聖なる結婚”が性的倒錯と人間の生贄の儀式へと変貌した。それが、マルドゥクの拝ませた“空のはしけ”ベンベンの偶像崇拜と重ねられ、偶像崇拜には性的倒錯や人間の生贄が不可欠とされたのである。

また、マルドゥクは貨幣経済を創り出した。当初、貨幣は物々交換を効率化するための“手段”だったが、それがいつしか“目的”となり、金（かね）のために人々が争い、血を流すこととなった。金に関わる神は“マモン・ラー”と呼ばれ、やはりマルドゥクを暗示する“ラー”という名が込められた。

しかし、神々からの教えをそのまま継承していた者たちもいた。それは、ハランに派遣されたイブル・ウム一族で、彼らは神々の指示によって、安全な地下へと避難していたのである。そして、地上が安全な状態になってから、機を伺って地上へと戻って来た。

.....
ひかり：偶像崇拝の根源バアルは元々エンリルで、後にマルドゥクを暗示する言葉となったのは以前に聞いたけど、偶像崇拝やら拝金主義やらの根源でもあって、どうにもならないわね、最高神となったクセに！

建：“聖なる結婚”の儀式の根源はイナンナだが、それをここまで酷くしたのはマルドゥクだった。世界中で見られた人間の生贄の儀式は、この後、マルドゥクが世界を放浪して最高神であることを普及したことに依る。

それに、日本語では“金”と書いて“きん”とも“かね”とも読むだろ？ニビルへのキンからカネができ、それが手段から目的へと変貌したんだが、使い方次第で表（＝善）にも裏（＝悪）にもなることを、昔の日本人はこのような“事実”から知っていて、そういう二重の意味を与えたんだよ。

ひかり：ありもしない妄想が妄想を生み出した、てどういうこと？

建：以前、宇宙の誕生について説明したよね？物質宇宙の基本的物理法則として、星々は創造のエネルギーと電磁場的に共鳴し、星々に誕生した生命体も電磁場的にその星は勿論のこと、創造のエネルギーとも共鳴しあう相互関係だ、と。

人間の想念は脳内の電気信号の作用だから、電磁場を生み出す。その思考波が共鳴したり打ち消しあったりするんだが、その共鳴作用によって、良い想念はより良い想念へ、悪い想念はより悪い想念へと増幅される。天皇陛下が常に祈りによって世界を良い方向へ導こうとされていたのは、良い想念の増幅作用の端的な例だよ。

同様に悪い想念も増幅して、いつからか、その創り出された悪い想念エネルギー体で人間の思考が影響され始めるようになり、より悪い現実を創り出すようになった。そして、黒魔術などが生み出され、想念の負のスパイラルが始まった。これが、様々な宗教で言うところの、悪とかサタンなどと言われるものの正体だ。カバラで言えば、「生命の樹」の下降だよ。そのような想念を生み出す元になったのがマルドゥクだった、ということさ。だから、聖書では彼の帝国“大いなるバビロン”は崩壊することになっていたわけだ。

ひかり：人間の想念って、恐ろしいのね…。だから、日本では言霊信仰で、悪いことは口にはしない、ということだったのか…。

建：うん。マモン・ラーも地獄の4人のサタンの1人とされ、この名が“マネー”の語源となった。つまり、21世紀初頭まで続いた貨幣経済は、マルドゥクのバビロニア帝国の貨幣経済が元だった。マモン・ラーは双頭の鷲で、フリーメイソンのシンボルでもある。双頭の鷲の意味は、狡猾、虚偽、欺瞞だ。しかし、名前に“ラー”がある以上、これもマルドゥク＝バアルを象徴しており、狡猾、虚偽、欺瞞に相応しいのさ。

ひかり：地下へ避難していて、地上が安全になってから出て来たイブル・ウム

の一族が、ひょっとして、地底人とかと思われたわけ？

建：解ってきたようだね！そうさ、それが第4の“神聖”な地域と結び付き、そのような惨禍を生き残った者たちが地底などに避難し、理想郷＝シャンバラとも言える高度な文明を築いているという誇大妄想となった。シャンバラとは神々の第4の“神聖”な地域のことさ。それが日本では、須弥山（しゅみせん）とか弥山（みせん）と呼ばれてきた。ただし、“遠い東の土地、高い山々の土地”ヒマラヤへ行ったイギギの子孫たちは、シャンバラ伝説と混同された。確かに、彼らは人類よりも高度な文明を維持していたからね。

ひかり：20世紀後半から、盛んにチャネリングとかで宇宙人や高次の存在とコンタクトした、なんて言われ始めたけど…それは…

建：人間の悪い想念が生み出した邪悪な電磁場エネルギーへのコンタクトさ。だから、テレパシーでコンタクトしたとか、UF0に乗せられて金髪碧眼の宇宙人に導かれたなどという体験談は、チャネリングによってサタンの意識が潜在意識に働きかけることに因る、幻覚や妄想に過ぎないと言える。変な“お告げ”の類もそうだ。霊能者と言われていたほとんどは偽者。何に共鳴しているのか、解ったものではない。本物は、僅かな人たちだけだった。例えば、君の血統のような、ごく一部の氏族の者に限られる。20世紀に世界を陰で操っていた連中は、盛んにこのような悪の意識とコンタクトしていたのさ。

とりわけ20世紀オカルトの元祖的存在とも言えるブラヴァツキーは、古代エジプトのイシス・オシリス黒魔術を基本としており、それはマルドゥクによるでっち上げと偶像崇拜が根本だ。

ひかり：マルドゥクはエジプトのラーでもあったから、エジプトのシンボル、ピラミッドを利用して、ニムルタによって破壊された冠石に目を入れて…

建：いや、そのようなカバラの類の考案はすべてニンギシュジッタだ。後からマルドゥクが利用したに過ぎない。

ひかり：一体、マルドゥクって、何なの？

(2) ミタンニとヒッタイト

神々の核戦争はBC2,024年に起きたが、生き残ったのはイブル・ウム一族だけではなかった。マルドゥクのバビリは勿論のこと、それよりも北の地域やモヘンジョダロ・ハラッパよりも東の地域、“5つの都市がある緑に囲まれた溪谷”よりも西の地域など、人類やイギギの子孫が着実に増えていた。イブル・ウムの一族は中でも、神官であり真の王家、王の中の王、という位置付けである。

イブル・ウム直系以外のシュメールの一族に、フルリと呼ばれた一族がいた。シュメールの栄光の時代の最後、ウル第3王朝（BC22世紀からBC21世紀）の頃、大きな勢力を保っており、シュメールで服飾産業を管理し、人材を供給していたのである。

しかし、核戦争後、ウルがバビロニア傘下となる前に、一部が北方へ移動し、ミタンニ王国を築いた。旧約ではホライト（ホリ人、自由な人々）と言われ、

シュメールからアッカド、アナトリアまでの広い範囲を支配していた。フルリは言語学的にはシュメールだったが、アッカドの要素もあった。アッカドはイシュクルの領地だったが、仲の良かったウツとイナンナの影響も大きく見られる地域である。

また、時を同じくして、北イランやコーカサス地方を中心とした地方からインド方面まで移動した民族があった。アーリア人（高貴な人間）である。イナンナを主神とするアーリア人はインドにヴェーダをもたらし、ヒンズー教は“人間の手に依らない”神聖な経典としてヴェーダを基本とした。インドの創造神はやはりイナンナだが、ヴェーダはサンスクリット語は勿論のこと、ギリシャ語やラテン語などヨーロッパ系言語の祖先で、ギリシャ神話とヴェーダの神話は類似している。このアーリア人のもう一方は西方へ移動し、ヨーロッパへと辿り着いた。ギリシャへの窓口となっている場所がアナトリア高原で、彼らはそこにヒッタイト王国を築いた。ヒッタイトの主神は雷と稲妻の神テシュブ＝イシュクルで（ギリシャでのゼウス）、ウツとイナンナも同格だった。他にもシュメールの神々を祀っていた。エンリルは“古い神”、エンキは“昔の神”と言われ、アヌは天の王だった。ヒッタイト語には大量のシュメールの象形文字、音節、言葉が使われており、シュメール語が高度な学識の言語だった。

フルリもまた、ヴェーダと同じ名前によって幾つかの神々を呼んだ。そして、文化的・宗教的にヒッタイトに大きな影響を与え、ヒッタイトの神話はフルリに由来した。

ミタンニのフルリは特に馬の取り扱いに習熟しており、ヒッタイトとミタンニは激しく争った。後にミタンニとエジプトは政略結婚により同盟を結び、アッシリアと対抗した。アメンホテップ三世（BC1,402年～BC1,364年）は政略結婚の申し子である。このように、この地域は絶えず争いが絶えなかった。

ヒッタイトのアナトリア高原は鉄鉱石の産地で、製鉄業が盛んだった。それ故、鉄の武器によって周辺地域を侵略し、後にはバビロンも攻略してカッシート王朝（BC1,500年頃～BC1,155年）を築いた。最も特筆すべきは、太陽崇拝があったことである。鹿や牛の像もあったが、それらは太陽崇拝に結び付けられており、太陽を引く馬の像などが残されている。天候を司る神テシュブ＝イシュクルを主神とし、太陽女神をその配偶神と考えていた。

.....
ひかり：フルリはシュメールのコピーで、ヒッタイトは更にフルリのコピーということ？

建：そうだね。

ひかり：ヒッタイトと言えは製鉄だけど、この話からすると、シュメール起源かしら？

建：以前の話をよ～く思い出してみよう。マルドゥクの息子アサルがイギギの策略によって殺された時のことを。

ひかり：そうか、アサルの息子ホロンが復讐する際、大叔父ギビルが鉄の秘密

を教えて武器を作って戦ったわ。だったら、製鉄はシュメール文明が発生する以前からあったアヌンナキの技術なのね？

建：その通り。

ひかり：ヒッタイトでの太陽崇拝、て太陽神ウツのこと？

建：ああ。主神は確かに嵐と天候の神イシュクルだったが、イシュクルはウツ、イナンナと兄弟のように仲が良かったから、この3人が同格とされ、イシュクルに太陽神的性質が加わった。そして、イナンナはイシュクルのことをドゥドゥ、“最愛の人”と呼んだから、イナンナが配偶神としての太陽女神と見なされた。

ひかり：人類は、すぐに誤解するのね。

建：それも、大元の話をもっと正しく理解していないことが原因だよ。特に、太陽神は日本以外の国では基本的に男神だが、ヒッタイトに太陽女神という概念があったことは、注目すべきことなんだよ。

ひかり：それって、…イナンナが女神・天照大神の原型ってこと？

建：(にやりとして) かつて、太古ヤマトの大王家でもそうだが、神宮でも天照大神と共に豊受大神が祀られていた。極秘伝では、天照大神の荒魂(あらみたま)が豊受大神、豊受大神の荒魂が天照大神というものもあった。ならば、天照大神と豊受大神は一神と見なすことができる。そうすると、豊受大神の豊穰神的性質は明らかにイナンナ由来だから、ヒッタイト起源の太陽女神イナンナの性質を付加して、女神・天照大神が創られたとも考えられるね！

ひかり：確か、ヒッタイトには八岐大蛇退治の元となった神話があったわよね？
…竜神イルルヤンカシュと…

建：嵐神プルリヤシュの戦いさ。イルルヤンカシュは海の支配者とされた竜だよ。

“嵐神プルリヤシュと竜神イルルヤンカシュが争った時、イルルヤンカシュの強大な力の前に、天候神である嵐神プルリヤシュは敗れ去った。そこで、風と大気の神である女神イナラシュに助力を求めた。

女神は盛大な酒宴を開き、イルルヤンカシュを招き、イルルヤンカシュを泥酔状態にした。女神は人間の中から選ばれたフパシヤシュという男に、泥酔して動けなくなったイルルヤンカシュを縛ることを依頼した。フパシヤシュは女神と一夜を共にすることを条件に、イルルヤンカシュを縛り上げた。その後、嵐神プルリヤシュにより、イルルヤンカシュは殺された。(この後、フパシヤシュは女神の家に軟禁され、最終的には女神によって殺された。)”

嵐神プルリヤシュはイシュクル、風と大気の神である女神イナラシュはイナンナさ。ここでは、イナンナに“風と大気”というエンリルの性質が付与されている。また、“女神と一夜を共にする”ということで、イナンナの“聖婚”が暗示されている。この地域はマルドゥクが自らの正統性を流布し始めた地域だから、イルルヤンカシュはマルドゥクのことだ。つまり、邪悪な竜マルドゥクさ。

ひかり：八岐大蛇の逸話ではスサノオが大蛇を切ったことになっているけど…

建：この話ではイナンナが策を練り、イシュクルが切っている。八岐大蛇を切った十握剣は尾を切った時に刃が欠けてしまい、そこから草薙神剣が出てきたので、当時の武器から考えれば、十握剣は青銅剣、草薙神剣は鉄剣ということで、ヒッタイトの製鉄技術を暗示している。そして、スサノオは牛頭天王で、その原型はシヴァ神でイナンナだから、八岐大蛇退治の逸話はこの神話が元になっているんだよ。イナンナを中心に見れば、何の矛盾も無い。

ひかり：そう言えば、スサノオは八岐大蛇退治の際、クシナダヒメを神聖な櫛の姿に変えて自分の髪に刺したわ。確か、シヴァ神は髪に聖なるガンジスの女神ガンガーを閉じ込めた。似てるわね？

建：ああ、そのものだよ。インダスの主三神ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの中で、インダス文明の創造神イナンナの姿が最も投影されているのがシヴァだからね。

ひかり：インダスって、いろいろな神が登場して、しかも化身とかあるし、手は何本もあったりして、かなりとっつきにくいわ。

建：それも、第3の地域をイナンナが疎かにして、文明が開かなかったためさ。じゃあ、ここでヴェーダも出て来たことだし、インダス文明について説明しよう。

(3) インダス文明

① 大まかな歴史の流れと輪廻転生

ヒンドゥースタン平原を形成したインダス川に沿って南西に進むとシンド（スィンドゥ）に辿り着くが、ここから偉大なインダス文明が始まった。後にインド亜大陸に進入してきたのはイナンナが主神のペルシャ系アーリア人で、インド語の“s”がペルシャ語では“h”に対応するので、“シンド”が“ヒンドゥ＝ヒンズー”となった。更に、後にアレクサンダー大王と共に大量進입してきたギリシャ語では“インド”となる。また、スィンドゥの“スィ”は英語の“th”の発音に相当し、“テンドゥ＝テンジク”となり、これが漢字で“天竺”となった。インド人は自分たちの国をバーラト（バーラタ）と言い、これは二大叙事詩の1つ「マハーバーラタ」に由来している。

モヘンジョダロやハラッパーのインダス文明の担い手はドラヴィダ人だったが、それは第3の地域の最初の人たちだった。“大いなる惨禍”の後、アーリア人が侵入してきたので、ペルシャとインドの神話はほとんど同じだが、登場人物の敵と味方の関係が逆である場合が多い。これは、どちらがイナンナを招聘するかという対立関係にあったためである。

アーリア人が侵入し、支配者として君臨してから階級制度（ヴァルナ）が誕生した。4つのヴァルナは上位からバラモン（宗教者）、クシャトリヤ（王族、貴族、戦士）、ヴァイシャ（一般市民）、シュードラ（奴隷）である。15世紀にインドに来たポルトガル人が、人種や血統を意味する“カスタ”と呼んだが、それが英語化してカーストとなった。更に、これ以外にもアウト・カーストが存在し、不可触民とされている。

アーリア人が口頭伝承してきた宗教思想がインド哲学の根源で、後に文書化

されてヴェーダとなった。根本聖典（サンヒター）はリグ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダで、主に祭祀のしきたりや呪文、神々への讃歌などが記されている。最も重要で最も古いのがリグ・ヴェーダである。

ヒンズー教の礎であるバラモン教はヴェーダを基礎とし、祭儀書ブラーフマナ、森林書アーラニヤカ、奥義書ウパニシャッドから成る。その特徴は、人間と宇宙の対応にある。“永遠に存在する個人の本体＝我＝アートマン”と“宇宙の根本原理＝梵＝ブラフマン”は究極的に一体であり、一体化させるのが人間の生きる目的であり、それを“梵我一如”と言い、“悟りの境地”である。そこにインダス文明と土着信仰が合流し、祭祀中心のバラモン教となった。バラモン教は更に土着神を取り込んでヒンズー化し、叙事詩の成立を経て、ヴィシュヌ派とシヴァ派へと二大宗派化していった。

梵我一如の概念は、ヘルメス思想と同じである。ヘルメス思想では、創造主と被造物は本質的に同一であり、同じ一者の異なる現れにすぎず、「全は一であり、一は全である」と考える。そして、下のものと上のもの、小宇宙と大宇宙が本質的に同一であり、互いに照応し合っていると考える。

輪廻転生を説くのはバラモン教で、人間は必ず人間に生まれ変わるとされている。どの階級に生まれ変わるかは、前世での行いに因る。だから、低カースト者は前世の行いが悪かったのであり、そのため、彼らがどんな悲惨な目に遭っているように助けないし、助けられようとも思わない。そして、輪廻転生の循環から抜け出す方法が梵我一如であると考えた。

釈迦は、ペルシャからインドにかけての広大な地域に住んでいたトルコ（セム）系遊牧民の流れを汲む北インドのサカ族の王子で、本名はガウタマ・シッダールタである。釈迦は形骸化したバラモン教を批判した。そして、バラモンが認めていたヴァルナも輪廻転生も否定した。人間が行いによって動物界などに転生するというのは後世の例え話で、釈迦は言っていない。実は、輪廻転生の概念は根本聖典には無く、後のウパニシャッドで初めて登場する概念で、元々は無かったのである。それもほとんどが例え話で、真実ではない。

.....
ひかり：ドラヴィダ人にしてもアーリア人にしても、いずれもイナンナが主神なわけね？

建：そう。だから、融合することができた。どちらがイナンナを招聘するかで、対立関係にはあったけどね。

ひかり：梵我一如の概念がヘルメス思想と同一と言っても、ヘルメス思想はギリシャよね？

建：アーリア人のもう一方は西方へ移動し、ギリシャへの窓口となっている場所のアナトリア高原にヒッタイト王国を築いただろ？

ひかり：そうか、元は同じなんだ。

建：ヘルメス思想では、人間と神は本質的に同一であり、それを“認識（グノーシス）”しさえすれば、人間を神のレベルにまで高めることができると説

く。ヘルメスはギリシャでは叡智の神とされ、別名トートだから、ニンギシュジッダのことさ。その証拠に、ヘルメスは長い剣に2匹の蛇が巻き付いたカドゥケウスの杖を持つ姿で描かれ、前にも話したように、ニンギシュジッダと同じシンボルだよ。これが後に誤解され、ヘルメスを神官、王、賢人（哲学者）である三重に偉大な者“トート・ヘルメス・トリスメギストス”と言われ、エノクと同一視された。そして、マルドゥクの影響によってエノクはあらゆる秘教の大元とされ、彼が天使との会話に用いたエノク語は、至高の力と叡智をもたらす呪文とされてしまったんだ。



ひかり：確かに、創造主と被造物は本質的に同一というのはある意味本質だけど、それを知っていたニンギシュジッダは、やはり天才だわ！それをまたマルドゥクが…！

建：その影響は輪廻転生の概念にも表れているね。“復活、長寿＝不老不死”を例えたものが、誤解されてしまった。だから、釈迦はそれを否定した。そもそも、助けないのは良くない行いだから、来世は低カーストに生まれ変わるはずだ、という矛盾に彼らは気付いていなかったんだね。…実は釈迦は、後に登場するヘブライの民の末裔なんだよ！

ひかり：日本もそうよね！だから、神道と仏教は融合できたわけね。けど、誰かの生まれ変わりだとか言っている人も多いけど…本当に、輪廻転生は無いの？

建：基本的には無いだろう。例えば、神への道とも言うべき神道では、個人としてのお祀りは50年祭までで、以後は歴代の祖先と同化したと見なす。天皇や歴史上の有名人物は例外的な場合もあるが、基本的には50年が1つの区切りさ。これには二通りの考え方ができる。1つは、御魂が完全に神の下へ戻る、ということで、創造のエネルギーと一体化するということ。もう1つは、創造のエネルギーではないが、地球上に人類という知的生命体の御魂として存在した生命エネルギーと一体化するということ。いずれにしても、神と一体化して家と子孫と国を守る、という考えからすると、神道は転生を認めていない。

ひかり：そうよね、転生があるとしたら、人類の増加は魂の分裂が無いと説明できないわよね。それに、お墓なんか作って供養しても、どこかに転生していたら無意味よね？

建：ああ。だから、自分は〇〇の生まれ変わり、と言っている人は、どこまでの信憑性があるのか？ということさ。

これは神々ですら未だ研究中の深い命題なんだが、生命の発生には、創造のエネルギーが注入される。そして、生命活動を終わると、その惑星の生命体のエネルギーは、惑星が消滅するまで、惑星周辺のどこかに蓄えられる。地球だと、太陽からの莫大な放射能を遮断している強力な電磁場のヴァン・アレン帯があるから、本質が電磁場である生命エネルギーはそこからは出られないので、その内部のどこかなんだろう。惑星が消滅すると、創造のエネルギーに吸収されるのか、はたまた、ある期間を経た後、どこかの惑星系に移動するのかは、喧々諤々の議論が成されているが、いずれにしても、創造のエネルギー自体の進化のためにあることは間違いない。

で、だ。魂、すなわち生命エネルギーが本来戻るべきところに戻らず、生きている人間に憑依すれば、それは転生したようにも見えるが、本来の転生ではないよね？チベット密教のグル、ダライ・ラマは転生し続けていると言われていたが、それはダライ・ラマとしての素質を有したオーラの話なのか、はたまた、何故かダライ・ラマの御魂は戻るべきところに戻らず、生きている人間に憑依し続ける、ということなのか、何とも言えないね。今後の詳しい研究が必要だよ。

ひかり：う～ん、とてつもなく難しい問題ね…。

建：そりゃ、そうだよ、言わば生命の本質にも関わる問題だからね。ちなみに、神道では人の体内にある生命エネルギーを“たま”、体外に出てしまったものを“たましい”と言う。“盲（めし）いる”という言葉があるが、これは“視力を失う、目が見えなくなる”ということで、病気の場合を除き、それは亡くなることを意味する。だから、“たま”が“めしいる”ということで、“たましい”なのさ。

ひかり：ふ～ん、また 1 つ、勉強になったわ。ところで、一旦創造のエネルギーと一体化したら、また生命エネルギーとして人体に入るのかしら？

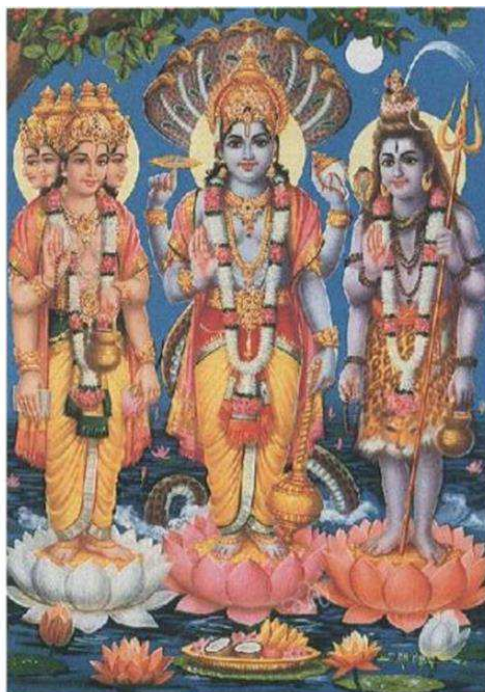
建：こればかりは、死んでみないと解らないね。しかし、死んで意識が無くなるのだとしたら、結局、生死の問題は創造のエネルギー以外に誰にも解らない、というのが、この宇宙の法則ということなんだろうね。

②ヒンズー教の主神とインダス・カバラ

ヒンズー教の神々の最大の特徴は、多種多様な化身（アヴァターラ）が存在すること、多くの顔や腕を持つ非現実的な姿であること、そして、男性器の象徴であるリンガと女性器の象徴であるヨニを崇拝することである。

主たる創造神はブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三柱である。ブラフマーは仏教の梵天だが、宇宙の根本原理ブラフマンが擬人化された創造神。後はサラスヴァティーで、仏教の弁財天。ヴィシュヌやシヴァはブラフマーの命令によって魔人退治に出掛けたりする。だが後に、この二神がブラフマーに取って代わることとなった。これら三神は本来一体であり、同一の神が宇宙の最高原理を創造する時にはブラフマー、維持する時にはヴィシュヌ、破壊する時にはシヴァとして現れる三神一体＝トリムルティという考えが一般的である。トリムルティを表す図では、向かって左からブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの順

に描かれ、本来、均衡の柱として中心に描かれるべきブラフマーは、向かって左に追いやられている。



ブラフマー ヴィシュヌ シヴァ

(様々なインダスの神々の図象は以下のページから引用。

<http://www.k5.dion.ne.jp/~dakini/tenjiku/zukan/index.html>

<http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Desert/2995/linga.htm>)

ヴィシュヌは仏教の那羅延天（ナラエンテン）、毘紐天（ビチュウテン）で、リグ・ヴェーダでは数ある太陽神の中の 1 つ。後はラクシュミーで、仏教の吉祥天女。破壊を司るシヴァが恐怖と温和の二面性を有するのに対して、ヴィシュヌは温厚で慈悲深く、熱心な信者に対して必ず恩恵を与える。この性格は、世界が危機に瀕した時、人間や動物に姿を変えて出現し、窮状を救うという化身あるいは権化による“救世主的性質”によく表れている。ヴィシュヌの化身にはラーマ、クリシュナ、マツヤ（魚）、クールマ（亀）、ヴァラーハ（猪）、ヌリシンハ（人獅子）、ヴァーマナ（矮人）、斧を持つラーマ、ブッダ、カルキがあり、特にクリシュナはイエスの予型とも言える類似性を示している。

ヴィシュヌ本来の身体的特徴としては、青黒い肌と 4 本の腕、蓮華のような目を持つ。黄色い衣服を纏い、アナンタ龍王（7 つのコブラの頭を持つ龍の化身、ナーガ）に腰掛けたり、その上で眠ったり、体に巻きついたりしている。また、4 本の手には円盤、法螺貝、棍棒、蓮華を持っている。

シヴァは仏教の大自然天、大黒天で、世界の創造・維持・破壊を司る。最も

シヴァに愛されていた後はパールヴァティーで、仏教の烏摩（うま）。シヴァにはヴィシュヌのような化身はほとんど無いが、性格を描写する多くの異名を持っている。その暗黒面としては、恐るべき者ということでバイラヴァ（畏怖者）、運命と死を支配することからカーラ（時間）、世界の破壊を司るハラ（破壊者）と呼ばれ、他にもブーテーシャ（悪鬼たちの主）、ムンダマーラー（髑髏を首に掛ける者）などといった呼び方もある。光の側面としては、恩恵を授けるのでシャンカラ（吉祥者）、支配者なのでマヘーシュヴァラ（大自在天）、全知全能であることからマハーデーヴァ（大天）、牧童に従う家畜のように人々がシヴァに従うからパシュパティ（家畜の主）などと呼ばれる。

暗黒の側面は、戦いと殺戮の女神ドゥルガーとカーリーである。ドゥルガーは航海の神として知られ、獅子を従えた美しい女神として描かれることが多い。カーリーは“時間”と“黒色”の2つの意味を持つ“カーラ”という言葉の女性形である。故に、別名を“時の女神”とも“黒色の女神”とも呼ぶシヴァの暗黒面を司る妃であり、シャクティとしてのシヴァのエネルギーの源泉ともなっている。神々の世界を支配しようとした魔神シュムバとその兄弟、手下のチャンダやムンダらと戦うことになったドゥルガーが、その怒りによって顔を黒色に転じると、そこからカーリーが現れたという。

シヴァの一般的な姿は一面四臂で、全身に灰を塗り、首には蛇を巻きつけている。腰には虎の皮を巻き、頭髮は荒々しく束ねて高く巻き上げ、その髪の中には聖なるガンジス川の女神ガンガーがいて、そこからガンジス川が流れ出している。2本の手には三叉戟（さんさげき）と斧を持ち、残りの手は恩恵を与える印（いん）と恐怖を取り除く印を結んでいる。

カーリーは黒色の肌で、首には仕留めた魔神たちの生首や髑髏の首輪を掛け、4本の手には血糊の付いた剣や縄、三叉戟などの武器、髑髏の付いた棒、血の滴る生首を持っている。腰には虎の皮を巻き付け、大きく開いた口からは長い舌を出している。横たわるシヴァにまたがり、目は血走り好戦的で、血を好み、破壊と殺戮を楽しむ強大なパワーを持った女神である。

また、シヴァといえばリング（男性器）崇拝である。リングは普通石で造られ、頭の丸い円筒形をしている。多くの場合、女性器を象ったヨニという台座に直立しており、陰陽の合一を表す。

通常、リングは石龕（せきがん）の内部に祀られている。龕は子宮を表し、生命の創造を表現している。ヒンズー教徒は、ここでマントラを唱えて祈る。リングの先端にミルクやギー（水牛や山羊の乳から作られた脂）、胡麻油などが掛けられる。これらはシヴァの精液を表しており、下のヨニに流れ落ちる。これにより、シヴァの精液はパールヴァティーの子宮へ入り、新たな生命を創造すると考える。

エジプトのカルナックにあるアモン神殿には、パピルス柱とロータス（蓮）柱が建っており、パピルスは下エジプト、蓮は上エジプトを象徴すると同時に、蓮は花で女性原理、下エジプトのピラミッドはそそり立つ山で男性原理を象徴するから、女性原理と男性原理の統合＝陰陽の合一を表す。これを更に象徴化すると、ヨニに座すリング、蓮華に座す釈迦となる。また、リングはシヴァ、

ヨニは妃パールヴァティーで陰陽の合一である。このような性器崇拜の起源はインダス文明にまで遡るが、これがヴェーダ由来のシヴァ信仰と結びつき、大いに発展した。更に、リングは柱である神を、ヨニは器である神殿を表し、神殿に神が降臨することも暗示する。



ドゥルガー



カーリー



リングとヨニ

ひかり：ブラフマーは最高神で、その後サラスヴァティーが仏教の弁天様でしょ？弁天様は日本ではイチキシマヒメで、天照大神とスサノオとの誓約で生まれた三女神の一柱よね？ということは、日本神話では天照大神が最高神的だから、それとブラフマーを重ねた、てことかしら？

建：その通り。サラスヴァティーはブラフマーが自らの体から造り出した存在だから、まったく構造としては同じだよ。

ひかり：日本神話の原型は、こんなところにもあるわけね。

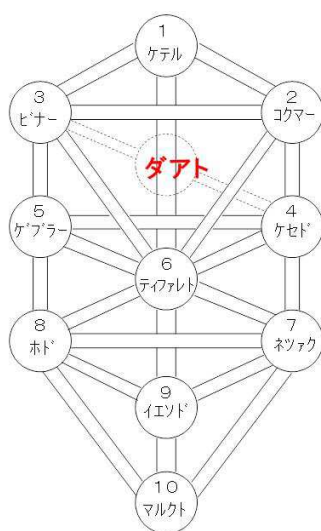
建：サラスヴァティーは水と豊穡の女神だから、原型はイナナだ。そして、水の神だから、イチキシマヒメも宗像大社の海神三姉妹の一柱として祀られている。更に、インダス文明の創造神がイナナだということは、ブラフマーもイナナだと言えるから、サラスヴァティーがブラフマーの分身というのも納得できる。

ひかり：ブラフマーは本来中心のはずなのに、端に追いやられているけど、そういうことはカバラとして可能なの？

建：「生命の樹」なんだが、場合によって、状況によって見方を変えることができるということさ。

中心が均衡の柱、向かって右が慈悲の柱、左が峻厳の柱で、均衡の柱は普段は関わりが少ないが最高神的な神、慈悲の柱が最も普段関わりの深い神、峻厳の柱は厳しさを備えた神だ。だから、神道で言えば慈悲の柱が和魂（にぎみたま）、峻厳の柱が荒魂に相当する。しかし、これはある側面から見た見方であって、別の側面から見れば慈悲の柱と峻厳の柱の役割が入れ替わったりする。つまり、三柱の神々は同等だが、状況に応じて、見方によって当てはまる柱が変わってくる。だから、本来の最高神だからといって、必ずしも中心の均衡の柱でなければならない、ということではないんだ。

これを端的に表しているのが、太秦の蚕ノ社などで見られる三つ柱鳥居だよ。3本の柱は均等だが、どこから見るかによって、中心の柱が変わってくるよね？



峻厳の柱 均衡の柱 慈悲の柱

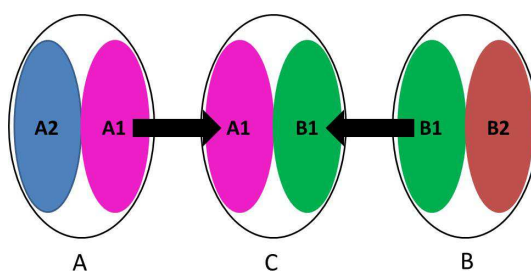


三つ柱鳥居

ひかり：なるほど…。何だか、混乱しちゃうけど、三つ柱鳥居の例は解りやすいわね。

建：ここがカバラの難しいところでもある。他にも混乱しやすい点を挙げよう。

例えば、神 A と神 B がそれぞれ A1 と A2、B1 と B2 という 2 つの側面から構成されているとする。ここで、神 A からは A1、神 B からは B1 という側面を持ってきて神 C を創作した場合、 $A1=C$ 、 $B1=C$ だからと言って、 $A2$ と $B2$ は異なるから、 $A=B$ とはならない。これを勘違いすると、 $A=A1=C=B1=B$ となって、神 A と神 B が同一、という誤った解釈となってしまう。



ひかり：ふ～ん、一度聞いただけでは解りにくいわね…。

建：まあ、いろいろ見てくると、だんだん慣れるよ。インダス・カバラでは、特にヴィシュヌの持っている法螺貝がキーとなっている。法螺貝はヴィシュヌの化身クリシュナに退治された海の悪魔パンチャジャナであり、ヴィシュヌがこれを吹き鳴らすと、悪魔が震え上がるという。この法螺貝は左巻きな

んだ。巻き方の見分け方は、巻き貝の尖った方を上に向け、殻の入り口が見えるように持ったとき、殻の口が向かって右側に見えるのが右巻き、左側に見えるのが左巻き。巻き貝の巻く方向は、理由は良く解っていないが、9割以上が右巻きなんだよ。そうすると、この法螺貝は通常の巻き方とは逆になっている。つまり、インダス・カバラは他の文明のカバラとは逆、ということを示している。すなわち、インダス・カバラでは「生命の樹」の慈悲の柱が向かって左、峻厳の柱が右なのさ！

ひかり：ええ～っ、そうなの？そんなの、聞いたことないわ？！

建：これは、シュメール、エジプト、マヤなどの創造神は男神、インダスはイナンナで女神だからなんだよ。

ひかり：なるほど！それなら納得できるわ。

建：ついでに言うと、仏教では釈迦の説法を“大法螺を吹く”と言ったが、今では“いい加減なことを言う”意味に変化してしまったんだ。

ひかり：ということは、ヴィシュヌの化身クリシュナはイエスの予型で、イエスの原型はイナンナで、ヴィシュヌの法螺貝が最高神はイナンナだと暗示しているということは、…ヴィシュヌがわざわざ中心に持ってこられたのは、ヴィシュヌがイナンナを暗示しているから？

建：そう言えるね。そうすると、ブラフマーもヴィシュヌもイナンナ、ということになる。イナンナは大神アヌに愛されたから、ブラフマーはアヌだとも言える。更に言えば、シヴァもイナンナだ！ブラフマーもヴィシュヌもシヴァも蓮華の上に立っているが、エジプトでは増水期に開花する蓮を生産力の象徴と見なし、夕方に沈み翌朝再び水面に出て開花する姿から再生のシンボルとも見なした。“再生、復活、不老不死”と言えばイナンナだろ？

ひかり：そう言われればそうだけど…。

建：リングとシヴァの関係について、神話では次のように説明されている。

“カルパ（劫）が終滅する時、ヴィシュヌは水底で眠っていた。すると光明が出現し、その中からブラフマーが現れた。ブラフマーはヴィシュヌを見つけて、どちらが真の創造者かということで口論となった。その時、火炎を発する途方もなく巨大なリングが姿を現した。驚いた 2 人は口論を止め、このリングの果てを見届けてきた方がより偉大だと認めよう、と合意し、ブラフマーは白鳥に、ヴィシュヌは猪に姿を変えて果てを確認しに行った。しかし、両者とも果てを確認することはできず、自分たちよりも偉大な存在に気づき、そのリングに向かって讃歌を唱えた。その時、リングの中から千手千足、三眼を有し、弓と三叉戟を手に持ち、象の皮を纏い、蛇でできた聖紐を身に着けたシヴァが現れ、雷鳴のような声で告げ、姿を消した。

「かつて我々三神は一体であったが、今はこのように分かれている。未来に於いてブラフマーはヴィシュヌとなり、私はカルパ発生時にヴィシュヌの怒った額から生まれるであろう」

これ以来、リングはシヴァの象徴となった。”

この神話は、三神がイナンナだということを暗示しているのさ。

ひかり：やっぱり、どこかにそういう“鍵”があるわけね。

建：シヴァはガンジス川の女神ガンガーを閉じ込め、そこからガンジス川が流れ出している。これは、シヴァをガンガーが洗礼している暗示で、洗礼の原型はエンキが瀕死のイナンナを救った時に使った「生命の水」だ。だから、この場合、ガンガーがエンキ、シヴァがイナンナで、「合わせ鏡」で男神・女神が逆転している。

また、シヴァの持っている三叉戟は「生命の樹」の暗示だが、ギリシャ神話の海神ポセイドンのシンボルで、海神エンキの暗示でもある。

そして、シヴァの額の真ん中にある“第3の目”は、瞑想ばかりしているシヴァに退屈した妻のパールヴァティーがふざけて後ろから両手で目隠ししたところ、世界は闇に覆われ、生類が恐れおののいたため、それを救おうとしてシヴァの額の中央が裂けて生じた新しい目だ。世界が闇に覆われ、額が裂けて光が復活したことは、イエスの“死と復活”の予型で、イエスの原型はイナンナだよ。更に言えば、この“第3の目”はいわゆるピラミッド・アイの暗示で、それは“ニニギク、ニンイギク（目の清い神）”と言われたエンキの暗示だったことは、前にも話したよね！

ひかり：う～ん、深すぎる…。

建：そして、何と言っても、シヴァといえばリング（男性器）崇拝で、性的なシンボルの根源はイナンナだっただろ？

ひかり：そうよね…。

建：ドゥルガーは航海の神だが、イナンナは航海術に優れたフェニキアの主神でもある。フェニキアという地名はイナンナの好物で「生命の樹」の元となったナツメヤシの学名フェニックスに由来する。フェニックスと言えば、不死鳥で火の鳥なんだが、これはフェニキアの女神アシュタルテ、すなわち、イナンナに奉げられた聖なる王の意味でもある。

ひかり：確かに、不老不死の根源はイナンナよね。

建：また、ドゥルガーは獅子を従えた美しい女神だが、イナンナは美の女神で、しばしば獅子あるいは豹を従えて描かれている。幾つかの“イナンナの冥界下り”のヴァージョンの中には、イナンナを冥界の門から救い出すために、エンキはナズシュ・ナミル（Nadushu-namir）と名付けられた人獅子を創った、という逸話もあるから、獅子はイナンナと関係が深く、ドゥルガーはイナンナそのものと言っても良い。

ひかり：そのドゥルガーからカーリーが現れたということは…、カーリーもイナンナということなのね？

建：そう、ドゥルガーが光の側面なら、カーリーは暗黒の側面だ。血や魔人たちの生首や髑髏は、好戦的な戦いの女神イナンナの側面を暗示し、横たわるシヴァにまたがり、シャクティとしてのシヴァのエネルギーの源泉ともなっているのは、性的妄想の根源となったイナンナの側面を暗示している。カーリーもシヴァも腰に虎の皮を巻き付けているのは両者が同じであることを暗示し、インドでは獅子よりも虎の方がメジャーだからだよ。

ひかり：ということは、日本には虎がいないのに、いろいろな虎の話が登場するのは、ひょっとして、…イナンナを暗示しているわけ？！

建：（微笑む。）このように、カーリーはシヴァの荒魂、パールヴァティーは和魂、ドゥルガーはその両方を併せ持つ性格ということは、神道の荒魂、和魂の大元がここにあると言っても良い。

ついでに言うと、一部のキリスト教異端派では“黒いマリア”が崇拝されていたが、原型はカーリーなんだよ。

ひかり：ということは、マリアもイナンナに関係があるわけ？

建：それについてはまた別の機会として、このようにインダスではカバラ的に解釈すると、化身はすべて同一であることを暗示するのさ。そして、多くの顔や腕はメルカバーや「生命の樹」に於けるセフィロトなどを象徴する。

ヴィシュヌの黄色い服は黄龍の原型で、アナンタ龍王の 7 つのコブラの頭はメノラー＝「生命の樹」。しかし、コブラは毒蛇だから「死の樹」でもあり、「生命の樹」と「死の樹」を同時に象徴している。これは、インダス・カバラの解釈を間違えると、即座に「死の樹＝左道」に堕ちることを意味する。

人差し指の先で回転する円盤（チャクラ）は、万物を断ち切る恐るべき兵器で、一切の無知を破る宇宙神の偉大な力の象徴だが、「生命の樹」に於ける栄光のティファレトあるいは隠されたダアトだ。

棍棒は力と権力の象徴だが、木なので「生命の樹」を象徴している。蓮華は水と再生と創造の象徴で、「生命の樹」を上昇していく象徴。そして、棍棒＝「生命の樹」は柱だから男性原理、蓮華は花だから女性原理で、蓮華と棍棒で陰陽の合一を表すと同時に、「生命の樹」を表す。

ヴィシュヌとシヴァの 4 本の腕は神の戦車メルカバーで、青黒い肌はシュメール系蒙古斑の象徴。これが後に誤解され、シャンバラの住人は青い肌、ということになってしまった。

シヴァの全身の灰は破壊という“罪”を行うが故の、主に祈る姿勢。蛇を巻きつけている体は「生命の樹」だが、コブラ故、「死の樹」でもある。

ひかり：ひゃ～っ、カバラが満載だ！

建：特に重要なのは、イナンナの両面が投影されているシヴァなんだよ。

③シヴァと牛頭天王

シヴァは、仏教では 6 つの天界を支配する魔王マヘーシュヴァラ（摩醯首羅）となり、意識して大自在天である。6 つの天界とは四天王衆（してんのうしゅ）天、三十三天、夜摩（やま）天、兜率（とそつ）天、楽変化（らくへんげ）天、他化（たけ）自在天であり、大自在天は他化自在天を支配する。それ故、他化自在天魔王とか第六天魔王とも呼ばれ、これが仏教最大の大魔王であり、大魔王とは暗黒の側面である。鬼門は鬼の住む方角で、この方角を守護する天部が伊舎那天であり、その別名が摩醯首羅でシヴァのことである。よって、鬼の原型はシヴァでもある。

ヒンズー教で牛を食べないのは、牛は神の化身だからである。その原型はシヴァの乗り物“聖なる牛ナンディン”で、天界の聖なる牝牛スラビと聖仙カシュヤパの間に生まれた牡牛で、“幸福なる者”の意味である。シヴァとナンディ

ンを重ねて描いた絵も多く、そのため、ナンディンはシヴァの化身と見なされることもある。また、シヴァの暗黒の化身バイラヴァは、顔は水牛で体は人間であるため、牛頭天王（ゴズテンノウ）とも言われる。

このように、インドでは牛は神だが、ヘブライでは偶像崇拝の対象だったのは金の仔牛アモンであり、偶像崇拝の神とされていたバアルも牡牛の姿をしている。そのため、シヴァに光の側面と暗黒の側面があるように、牛にも両方の意味が隠されている。

日本で牛に喩えられる神は、スサノオである。スサノオは牛頭天王とも言われるので、シヴァが原型である。スサノオは英雄神として祀られているが、高天原で暴れたことが原因で、天照大神が岩戸に籠もったことから、シヴァのような暗黒の側面がある。

一説には、中国で有名な神農の発音は“スサ”と言ひ、神農も牛頭人身だから牛頭天王である。仏教では、牛頭天王は祇園精舎の守護神であり、疫病をもたらす武塔（ブトウ）神とも呼ばれており、これも光の側面と暗黒の側面を併せ持つ。神農＝炎帝は後に西遊記に取り込まれ、火炎山に住む牛魔王とされてしまった。

つまり、流れ的にはシヴァ→牛頭天王→武塔神→神農→スサノオとなる。あるいは、イラン高原南西部に建国したエラム人の国には、スサという都市があった。エラム人はシュメールの地に浸入し、都市間の勢力争いに加わった。そのスサの守護神はインシュウシナクと言ひ、後に冥界神となった。スサノオは根の国＝冥界に下ったので、冥界神と見なすことができるから、スサは“エラムのスサ”由来でもある。

なお、釈迦の正式名ガウタマ・シッダールタのガウタマは“最上なる牛”を、シッダールタは“目的(実利)を成就せる者”の意味だから、釈迦も牛に関係している。

.....
ひかり：鬼の原型がシヴァで、鬼門を守り、シヴァは虎の皮をまとい、ここでは牛の要素も加えられたから、鬼門は牛と虎が合わさって、丑寅＝艮と言ひのか！

建：その通り！ここで、更に面白いヒントをあげよう。熊野大社の宮司家は？

ひかり：九鬼（くかみ：本来は「鬼」の上の点が無い）氏よね？

建：「鬼」という字の上の点を取って「かみ」と読ませている…。

ひかり：ということは、「鬼」とは元々神のこと！

建：その「鬼」という字の上の点が、鬼の角を表している。鬼の角は牛の角だ。

虎の皮をまとい…

ひかり：金棒（かなぼう）を持っている…。

建：金棒ではないけど、棒を持っているという点では、ヴィシュヌの棍棒だよ
ね？

ひかり：棍棒…こんぼう…金棒？！

建：ヴィシュヌもイナンナが原型だったよね？

ひかり：ということは…鬼は本来神で、牛の角と虎の皮、そして金棒で…牛虎金神…ウシトラノコンジン（艮金神）！

建：鬼門に押し込められた鬼とは、ウシトラノコンジンのことさ！

ひかり：そうすると、日月神示で言われているウシトラノコンジン＝国常立神って、シヴァことイナンナ？！

建：（にっこりと頷く。）

ひかり：その上、シヴァがスサノオということは、スサノオの原型はイナンナ！

建：シヴァは殺戮など暗黒の側面があるだろ？それはまさしく、マルドゥクの行為に怒り心頭に発したイナンナそのものだよ。そして、スサノオも高天原で乱暴を働いて、追放された。

ひかり：バビロンで、マルドゥクによってイナンナが消されたことね…。ということは、日本の本来の最高神はスサノオことイナンナだった！てこと？

建：スサノオにわざわざ牛頭天王が充てられ“てんのう”と読ませたということは、古代の大王家の最高神がスサノオだったという暗示さ。それにスサノオには蘇民将来の逸話があるだろ？“将来蘇る民”とは、封印されたウシトラノコンジンことスサノオを最高神として祀る一族が、将来封印が解かれて蘇るということなのさ。その“蘇り＝黄泉帰り”の根源はイナンナだろ？それに、日月神示では封じ込められたウシトラノコンジンは国常立神とされただろ？出口王仁三郎がスサノオの格好をしていたのも、満更ではなかった、てことさ。ちなみに、外宮の神官の一族、豊穰神・豊受大神を祀る度会氏の中には、出口姓の者がいる。

④その他の神々

ヴェーダの記述に用いられた古代サンスクリット語は、ゾロアスター教の聖典アヴェスターやアケメネス朝ペルシャの楔形文字碑文に残る古代イラン語に極めて近く、神々の名称や祭式の用語に於いても、多くの類似点が見られる。また、古代オリエントに於ける他地域の文献にも、ヴェーダの神々の名が見られるので、ヴェーダの神々はインド系アーリア人固有のものばかりではなく、インド・ヨーロッパ語族の中で東方に移動したアーリア人に共通のものが多い。

ヴェーダの神々の多くは、自然界の事象を基に神格化されたもので、天神デュータス（＝デウス＝ゼウス）、太陽神スーリヤ、暁の女神ウシャスは天界に、雷神インドラ、風神ヴァーユ、暴風神ルドラ、雨神バルジャニヤは空界に、火神アグニ、酒神ソーマは地界に住む。

雷神インドラはヴェーダに於ける英雄神で軍神であり、仏教の帝釈天。軍神ニムルタとイシュクルが原型。

火神アグニはラテン語“ignis”やイラン語の“火”とも語源を同じくする。アグニは天にあって太陽として輝き、空に於いて稲妻として煌めき、地上では祭壇の聖火として燃え、人の中にも怒りの火、思想の火などとして存在する。

スーリヤは太陽神、ヴァルナはイエスの原型でもあるミトラ＝ミトラス＝マイトレーヤと同様の契約の神。

ヴェーダ以前の土着神には、遺伝子の二重螺旋とニンギシュジッダを暗示する創造神ナーガ（男神）とナーギ（女神）、後にサナト・クマーラとされたクベーラ（毘沙門天）、リグ・ヴェーダでは太陽神の子とされていたが支那風にアレンジされて日本では閻魔大王となったヤマなどがある。

ひかり：ふ～ん、いろいろアレンジされているのね？

建：起源はすべてシュメールの神々さ。特に、火神アグニはペルシャのゾロアスター教の主神とされ、火の鳥フェニックスのイナンナを連想させる。ペルシャもイナンナが主神だからね！

⑤聖仙リシ

聖仙リシとは、ヒンズー教の仙人のことで、漢訳では仙人とも言われる。元は、ヴェーダに描かれた神の天啓に携わった詩人で、言わば預言者である。それが、世間から隔絶され、外見は宗教浮浪者と区別できないことから、後に宗教的悟りに達した修行者のように変化してしまった。

つまり、聖仙リシとは「生命の樹」の奥義を知り尽くした者であり、マスコミなどに登場する自称聖仙は、真っ赤な偽物である。また、一般的な仙人のイメージも誤りである。有名な聖仙としては七聖仙がいる。「シャタパタ・ブラーフマナ」の七聖仙はゴータマ、バラドヴァージャ、ヴィシュヴァーミトラ、ジャマド・アグニ、ヴァシシュタ、カシュヤパ、アトリである。「マハーバーラタ」では、マリーチ、アトリ、アンギラス、プラハ、クラトゥ、プラスティア、ヴァシシュタである。「ヴァーユ・プラーナ」では、更にブリグを加えて八聖仙とする。

現在も聖仙は実在し、不浄の地とされ、浮浪者がたむろするガンジス川東岸に住んでいる。本来、太陽が照らす南側から見て向かって右＝東が重要なのだが、インダス・カバラでは逆だから、太陽が照らす南側から見て向かって右＝東が穢れた側となる。そのため、聖なるガンジスの東岸に浮浪者がたむろしており、世間から隔絶されている。世間から隔絶されていれば、奥義を守るのに最適である。

聖仙は基本的に 12 人で構成され、全員で 1 人の聖仙を構成する。これは、3 人の大鳥で金鵄を構成するのと同じで、日本に於ける八咫鳥に相当する。

ひかり：インドにも日本の八咫鳥に相当する組織があるのね？

建：インドに限らず、ね。

ひかり：シヴァの話には苦行、修行が付きもので、タントリズムとヨーガが特徴的だけど、リシはどう考えてるのかしら？

⑥タントリズム

タントラでは、すべてのものは特定の周波数を有する振動音と見なす。それを視覚的に表したものがヤントラ＝曼陀羅であり、宇宙あるいは神を象徴する。曼陀羅は三神三界を表した「生命の樹」の象徴である。そして、聴覚的なものがマントラ＝真言である。

ヤントラ、マントラは永遠なるもの＝宇宙創造の意識と一体となる秘術である。しかし、本来タントラの説く梵我一如は難解であるため、タントラではシヴァ神（男性原理）と神妃シャクティ（パールヴァティー、女性原理）の性的合一による宇宙創世が説かれた。そのため、解脱への実践として、女神及び女性器崇拜、性行為、飲酒、肉食などが織り込まれた。これは、正統バラモン教からは断じて認められるものではなかったが、タントラのこのような呪術性に、一般大衆は惹きつけられた。

タントラとは本来、宇宙の真理を人体の神秘から知ろうとする、インドに於ける密教思想のことである。一般大衆に開かれた教えは顕教であり、一部の者を対象とした秘密の教えが密教である。タントラの実践者をタントリーカと言う。

リシが保持してきたタントラは、チベット密教やヒンズー教のタントラよりも古く、インダス文明からの口頭伝承による本来のタントラ＝原始タントラである。このタントラは人体に喩えられるため、誤って解釈すると、ダルマを踏み外して無意味な肉体修行を行ったり、カーマに堕ちる。ダルマとはタントラの奥義を求めて神に近づくことであり、カーマとは男女の性愛である。

「生命の樹」に右と左があるように、タントラにも右道（うどう）と左道（さどう）がある。右道タントラはダクシナカラと言い、徹底的に禁欲を説く。深い瞑想を主体に梵我一如を目指すハタ・ヨーガは、ダクシナカラが基である。しかし、本来の解釈が成されていないため、肉体改造を基本とした神秘思想となっている。梵我一如、神人合一を達成することにより不死の体を得られ、思い通りに肉体を消したり現れたりすることができ、透視や予知も可能になると信じる。つまり、仙人である。ハタ・ヨーガは強制的な肉体改造により、これを達成しようとする（悟りを開こうとする）が、非常に危険な行為である。このような肉体改造は神経を麻痺させ、幻覚を生む。やっている本人は、現実との区別が付かないため、恐怖のカーリーに会った後、シヴァに会うことができた、などという幻覚を信じてしまう。それは単に、本人の記憶がそのような光景を見させているに過ぎない。これは、例えば臨死体験者の経験談で、仏教徒は三途の川を見て、キリスト教徒は天使の集まりを見るのと同じことである。ある者は、手っ取り早く幻覚を生じさせるために、幻覚剤を使用する。神の酒ソーマは、毒キノコであるベニテングダケから抽出したものである。幻覚剤を使ってお告げをしたりする口寄せやシャーマンなどは、如何にも愚かな連中である。

左道タントラはヴァーマカラと言い、性愛を徹底的に迫及する快樂主義である。カーマは性愛指南書「カーマ・スートラ」として有名であり、多くの者た

ちが左道に堕ちた。カーマ最大のものがカジュラホ寺院の一面に彫られているエロティックな男女交歓像であり、神殿売春が主体だった寺院である。

リシはハタ・ヨーガを容認こそすれ、自らがヨーガを行うことはない。タントラの原理は、下から地・水・火・風・空の五大元素から積み上げられた世界観に基づき、人間の11器官がそれに対応する。11器官とは、5行為器官としての発声器官、手、足、排泄器官、生殖器と、5知覚器官としての耳、皮膚、目、舌、鼻プラス隠された思考器官マナスである。つまり、五大元素とは「生命の樹」を人体化して表現したアダム・カドモンに於ける五体満足を暗示し、隠されたダートを含めた11個のセフィロトを象徴している。

タントラは哲学として大きく6つに分類され、インド六派哲学となった。サーンキヤ、ヨーガ、ミーマーンサー、ヴェーダーンタ、ヴァイシェシカ、ニヤーヤ哲学である。

- ・サーンキヤ：この世を精神と物質の二元論で捉える。この2つの相克により人間は苦悩する。それ故、解脱のためには、精神と物質がまったく別のものであることを自覚する必要があると説く。
- ・ヨーガ：サーンキヤ哲学の中心に神を据えた。自我の欲望を滅し、宇宙と一体となる実践的システムを作り上げた。
- ・ミーマーンサー：祭祀儀礼の解釈。
- ・ヴェーダーンタ：ヴェーダを重視し、ウパニシャッド哲学の解釈を推進。
- ・ヴァイシェシカ：自然哲学。
- ・ニヤーヤ：論理学。

原始タントラの直系とも言えるのが、サーンキヤ哲学とヨーガ哲学である。サーンキヤ哲学に於ける精神と物質は世界を生み出す原理であるが故に、精神原理（プルシャ）、物質原理（プラクリティ）と言う。プルシャは絶対神のことではなく、霊我とも言われるように、あくまでも個人的な自我の上にある存在のことである。陰陽で表すならば、プルシャが陽、プラクリティが陰であり、プルシャは上向きの三角形、プラクリティは下向きの三角形で象徴される。

.....
ひかり：何だか、難しそうな話ね…。

建：簡単に言えば、インダスのカバラは左道に堕ちやすい、ということ。これは、創造神イナンナが性愛に溺れたからだよ。そして、イナンナはインダスを疎かにしたから、文明が十分に花開かなかった。つまり、知識が十分ではなく、誤解を生じやすかったんだよ。

ひかり：ここでヨーガが出て来たから、マントラとヤントラを詳しく聞く前に、ヨーガについてもっと教えて！

⑦ヨーガ

ヨーガ哲学とは、サーンキヤ哲学の中心に神を据え、自我の欲望を滅し、宇

宙と一体となる実践的システムである。

ヨーガの基本は、神話などにしばしば登場する“修行、苦行”である。この実践方法については大きく2つの流れがあり、1つは顕教としてのラージャ・ヨーガ（王者のヨーガ）であり、もう1つは密教としてのハタ・ヨーガである。前者は、ひたすら欲望を無くすことを主眼とし、欲望から解脱することで悟りを開く。このヨーガの実践者をヨギンと言い、マントラを唱えながら実践する。釈迦が行っていたのは、このヨーガである。ラージャ・ヨーガの経典とも言うべきヨーガ・スートラ（スートラ：教典）には八支ヨーガと言われる修行の8つの階梯（禁戒、歓戒、坐法、調息、制感、凝念、静慮、三昧）が記されている。消極的な修道の概念であるニローダ（“積極的に鎮め封じること”の意から、心の動きを抑止すること）を標榜し、哲学的追求に重きを置いた形而上学的修道論である。

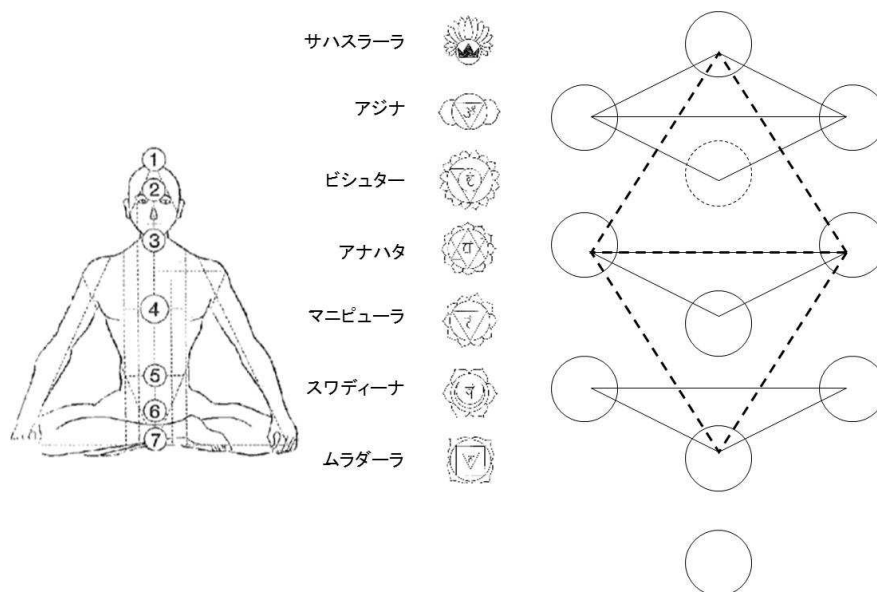
これに対して、ハタ・ヨーガはサーンキヤ哲学に基づき、俗的な属性であるプラクリティの否定によって聖なるプルシャとの合一を目指す。そのため、ラージャ・ヨーガのような階梯を踏まえず、一気に三昧（ざんまい）に至る方法である。ラージャ・ヨーガによって顕現したパワーを使い、俗的な世界を積極的に聖化させ、神々との合一を図る。このようなハタ・ヨーガは神秘思想とも言うべきものであり、仙人の概念へと発展し、道教、密教、禅の根源となった。ヨーガでも師のことを導師（グル）と言う。

タントラでは、実際の身体に対して“微細身体”と呼ばれる存在を想定する。これは、肉眼では見えず、触れることもできない。しかし、肉体と同じ形、大きさであるとされる。微細身体には、脊椎に沿って7つの霊的中枢があると考える。この霊的中枢をチャクラと言う。チャクラとは“輪”という意味で、ヨーガを極めし者には、霊的中枢が円形に見えるらしいことから、このように言われる。（ヴィシュヌが持っている円盤もチャクラである。）また、微細身体は大宇宙に対する小宇宙を象徴する。チャクラとは、人体を小宇宙に見立てた場合、人体の中心を貫く7つの中枢のことでもある。

①サハスラーラ（頭頂）、②アジナ（眉間）、③ビシュター（喉）、④アナハタ（心臓）、⑤マニピューラ（臍）、⑥スワディーナ（丹田）、⑦ムラダーラ（会陰）。

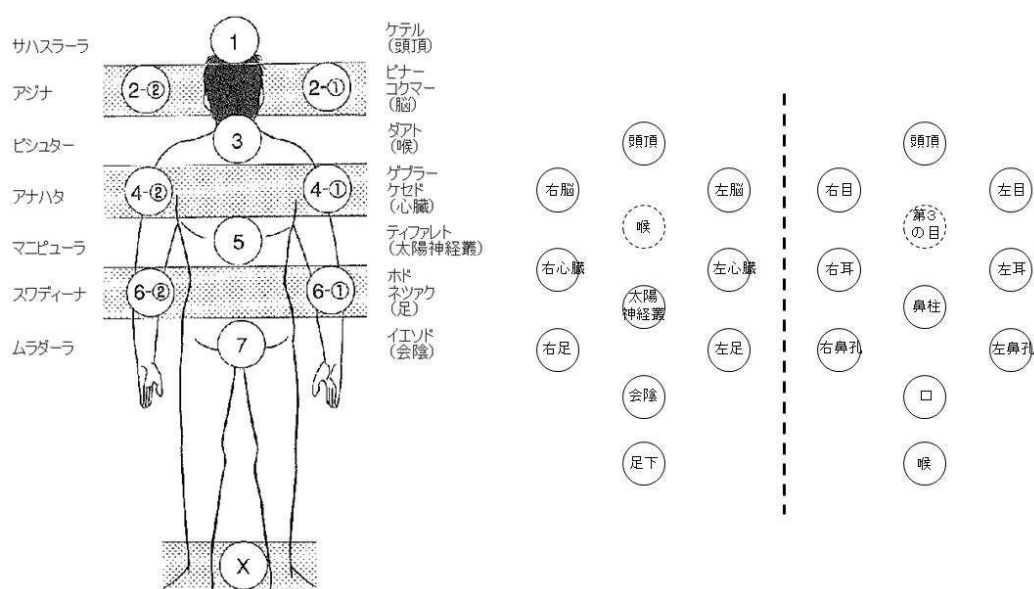
チャクラは「生命の樹」を人体化したアダム・カドモンと対応し、背骨に沿うセフィロトだけでなく、左右のセフィロトを中心に合わせた7段階を示す。「生命の樹」に於ける慈悲の柱は陽、峻厳の柱は陰で、均衡の柱は両者が一体となった太極を表す。それ故、慈悲の柱、峻厳の柱にある同じ高さのセフィロトは、均衡の柱に於いて1つに統一することができる。

①ケテル：頭頂、②ビナー・コクマー：左右脳、③ダアト：喉、④ゲブラー・ケセド：心臓、右心房・右心室、左心房・左心室、⑤ティファレト：太陽神経叢、⑥ホド・ネツァク：両足、⑦イエソド：会陰。



マルクトは足の裏のツボ“湧泉”として隠されており、脊椎には関与していない。また、アダム・カドモンの頭部も示しており、顔のカバラも構成する。マルクトは喉として、顔の外にある。

①ケテル：頭頂部、②ビナー・コクマー：両目、③ダアト：第3の目、④ゲブラー・ケセド：両耳、⑤ティファレト：鼻柱、⑥ホド・ネツァク：両鼻孔、⑦イエソド：口。



頭頂サハスラーラ以外のチャクラはマハットと五大にも対応している。サハスラーラは頭頂部から少々浮いた箇所に存在するので、微細身体に於ける実質

的な最上部のチャクラはアジナである。

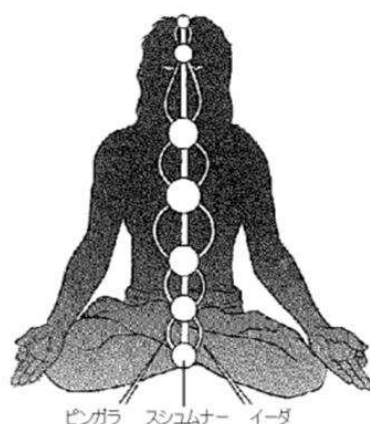
- ・ムラダーラ：地・四角形、スワディーナ：水・三日月、マニピューラ：火・逆三角形、アナハタ：風・六芒星、ビシュター：空・円形、アジナ：マハット、サハスラーラ：無し。

さて、7つのチャクラに大宇宙から絶対的エネルギーであるプラーナが降りると、チャクラの門が次々と開いて覚醒する。すると、ムラダーラ・チャクラで眠っていた生命の根源エネルギーが覚醒し、大宇宙の真理と一体化するために脊椎を上昇する。そのエネルギーをクンダリーニと言い、3回転半のとぐろを巻く神蛇で象徴される。

現在流布しているヨーガでは、次のように解釈されている。まず、呼吸を整えることにより、空間に充満している特殊な宇宙エネルギー“プラーナ”を取り入れる。これは“気”“オーラ”などとも言われる。そして、ヨーガの独特なポーズにより会陰部を刺激し、ムラダーラのクンダリーニを活性化させる。クンダリーニにはとぐろを巻いた蛇がいることをイメージし、そのとぐろを解きほぐすように、意識によってクンダリーニを脊椎に沿って上昇させる。上昇は熱さや振動として感じられる。上昇できるまでは、精液を漏らしてはならない。最終的には、頭頂のサハスラーラまで上昇させる。クンダリーニは神妃シャクティ、サハスラーラはシヴァであり、両者の神秘的な結婚により梵我一如を達成する。サハスラーラまで上昇したクンダリーニは、体の正中を通してムラダーラまで戻し、クンダリーニを体内で循環させる。これを大周天と言い、これを達成できれば超人（リシ、仙人）となる。

つまり、ヨーガにより体を柔軟にし、体内の霊的エネルギーの流れを良くすることにより、締め付けられているチャクラが開くようになる。そして、クンダリーニとプラーナが体中に行き渡ることにより、超人になれると考える。

カーマでは、クンダリーニの活性化のために、性愛を利用する。男女が共に行うことにより、シャクティとシヴァの完全なる合一を達成できると考える。



また、プラーナの通り道を気道（ナーディー）と言う。ナーディーは血管や

神経のように張り巡らされ、72,000 にも達するという。その中で最も重要なのは 3 本ある。脊椎を貫くスシュムナーを中心に、体の右半身から脊椎に絡みつくピンガラ（太陽のナーディー）と左半身から絡みつくイーダ（月のナーディー）であり、太陽と月に象徴されるように、右が陽、左が陰である。左右のナーディーは、アジナ・チャクラから伸びている。これは、人体としては脊椎を中心とした中枢神経と自律神経を示しているが、アダム・カドモンを正面に向けた時の、三柱の位置に相当する。そして、3 本のナーディーの交差点にチャクラが存在し、「生命の樹」に於ける三柱が 1 本に統合された時のセフィロトの状態を示している。

.....
ひかり：人体の中心を貫く 7 つの中枢チャクラって、結局、“イナンナの冥界下り”に於ける「生命の樹」の 7 段階のことなのね？

建：そうだよ。だから、プラーナとは「生命の樹」に降下する“雷の閃光”の象徴で、頭頂部から順にセフィロトのシンボルであるチャクラを降下し、ムラダーラに達する。そこから、今度は上昇する。上昇する神蛇は 3 回転半のとぐろを巻いているので、「生命の樹」に絡まる蛇さ。

つまり、チャクラはあくまでも大宇宙の真理を人体に例えたものであって、大宇宙の真理と一体化するためには、「生命の樹」の奥義を知る必要がある、ということさ。決して、肉体の修行や性愛に溺れることを言うのではないんだよ。そして、人体のすべてが「生命の樹」で成り立っていることを象徴している。あるいは逆に、人体の構造が大宇宙に通じる構造だから、神界に通じる奥義を「生命の樹」として象徴したとも言えるんだ。

ひかり：チャクラにはいろいろな形があるのね？

建：チャクラは 3 本のナーディーの交差点にあるから、締め付けられた状態になっている。それがヨーガによってチャクラが覚醒すると、開花した蓮華として象徴される。各チャクラの蓮華の花弁の数と色は、例えばサハスラーラは 1,000 枚で光、アジナは 2 枚で白、ビシュターは 16 枚で薄紫などとなっている。込められた意味は様々で、いろいろな解釈がある。

例えば、皇室の十六弁八重表菊紋を連想させるビシュターの色は薄紫で、紫は古代、どこの国でも最も高貴な色とされた。そして、微細身体にマルクト（足下）を加えると立ち上がった時の完全な人体となり、中心には全部で 8 個のチャクラがある。男女それぞれ 8 個で、陰陽の合一で 16 となる。また、エジプトの十六弁の蓮を持ってくれば、それは“復活、再生”を象徴するのさ。陰陽の合一という点では、六芒星が究極と言えるけどね。

だから、真の解脱者は肉体的修行を行わず、性愛に溺れず、薬物も使用しない、「生命の樹」の奥義を知る賢者のことなのさ。

ひかり：じゃあ、マントラは？

⑧マントラ

サーンキヤ哲学に依ると、世界の創造はプラクリティの動揺（振動）から始まる。プラクリティが振動して均衡を崩すと、その波紋は宇宙へ浸透し、能動

的な現象世界が始まる。プラクリティの振動を音によって表現したものをマントラと言う。

マントラは聖なる音声で、宇宙の根源的な力であるシャクティが宿っている。シャクティは女性原理に基づいているため、神妃を崇拝する呪文として説明されることもある。マントラの中のマントラ、聖なる音“オウム”は宇宙の根源的な音であり、この音から、絶対神をはじめとする森羅万象が生じたという。これをアルファベットで記すと“AUM”であり、阿吽（あ・ん、アーメン、アルファとオメガ、大神アヌ）に相当するが、実在の本質“サット・チット・アナンダ”が隠されている。これは、それぞれ“真の実在・純粹意識・無上の歓喜”という意味で、瞑想に於ける究極の目的とされる。それ故、“AUM”はトリムルティを表しているとも考えられている。

A：ブラフマー、U：ヴィシュヌ、M：シヴァ。

つまり、“AUM”とは音で表現された「生命の樹」で、宇宙の創造・維持・破壊を表す究極のマントラ（真言）である。

神々にはそれぞれマントラがあり、シヴァのマントラはフリーム、カーリーはクリームなどと言う。特に、チベット密教に於ける神々は“オウム・〇〇”となっているものが多い。例えば、阿弥陀如来はオウム・アミタプラバ・スヴァーハー、観自在菩薩はオウム・サマンタブッダーナーム・サハである。ちなみに釈迦は、サルヴァクレーシャニシューダナ・サルヴァダルマヴァシタープラターパガガナサマーサマ・スヴァーハーで、“オウム”は含まれない。

チベット密教はサンスクリット語だが、サンスクリット語の呪文そのものがマントラである。その音（おん）を漢字で音写したのがお経であり、代表的なものが般若心経である。仏教に於ける最も重要なマントラは“オウム・マニ・パドメ・フウム”で、“全知全能の神、宝石が蓮華の中にあり＝「生命の樹」の中に真理あり”という意味である。

マントラで重要なのは意味ではなく音声と見なされているため、お経などは意味を知られずに唱えられている。解らなくても唱えることに意義がある、というのは、そういうことである。

.....
ひかり：マントラは音という最も単純明快な波動だから、創造のエネルギーとも共鳴するのかしら？

建：その通り。単に言葉の意味だけだったら、他の言葉に置き換えても良い。

しかし、マントラはその1つ1つの言葉に意味があるのは勿論、唱えた時の音が最も重要なのだ。だから、考えに考え抜かれて創られている。

ひかり：日本の仏教では、どんな宗派であろうと大抵、般若心経を唱えるわよね？

建：神道大祓全集の最後にも掲載されている！

ひかり：ということは、神道が仏教と習合できたのは、…本質に於いて同じ、ということなの？

建：仏教の神髄は隠された教え、密教にある。ユダヤ教の隠された教えがユダヤ神秘主義カバラにあるのと同じさ。その密教を大切に護持してきたのがチベットなんだが、それを支那経由で日本に持ってきたのが空海だ。だから、空海が開いた高野山の真言密教こそ、仏教の神髄と言える。その真言密教で最も重要なのは般若心経で、仏像では十一面観音となる。

ひかり：十一は「生命の樹」の隠されたセフィラ「ダアト」も含めたセフィロトの数で…十一面観音は木像だから…「生命の樹」の奥義そのもの！神道で言えば真榊ね！

建：その隠された知恵、ダアトは、十一面観音の裏にある笑った顔だよ。その観音像に水を掛ければ、「生命の樹」に「生命の水」を掛けることになる。

ひかり：そうか、以前に聞いた東大寺のお水取りね！僧侶がお香水という聖水を取り、十一面観音に懺悔するということは、「生命の樹」に「生命の水」を掛けることで、イナンナの“復活”の場面が起源ね！

建：そのお香水は若狭の遠敷（おにゅう）川から送られてきているとされるが、“にゅう”は“丹生”で不老不死の妙薬とされた硫化水銀を暗示する。これは水銀朱とも言われ、神社の鳥居などの赤い色は元々はこの色だが、不死鳥フェニックスをも暗示する。そして、“若狭”は“永遠の若さ”をも連想させる。

ひかり：そうすると、般若心経にはどんな奥義が隠されているのかしら？

⑨般若心経

サンスクリット語での解釈は、次のようになる。

仏説摩訶般若波羅蜜多心経

ブッセツマーカーハンニャーハーラーミーターシーンギョウ

“仏（釈迦）が説いた偉大なる般若波羅蜜多の教え”

観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、

カンジーザイボーサー、ギョウジンハンニャーハーラーミータージー、

（観自在菩薩、深般若波羅蜜多を行ぜし時、）

“観自在菩薩が、深遠な般若波羅蜜多の修行を実践している時、”

照見五蘊皆空、度一切苦厄。舍利子、

ショウケンゴウンカイクウ、ドオイッサイクーヤク。シャーリーシー、

（五蘊は皆空なりと照見して、一切の苦厄を度せり。舍利子よ、）

“五蘊あり、しかも、それらは自性空であると見極めた。シャーリプトラよ、”

色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、

シキフーイークウ、クウフーイーシキ、シキソクゼークウ、クウソクゼーシキ、

（色は空に異ならず、空は色に異ならず、色即ちこれ空、空即ちこれ色なり、）

“ここに於いて色は空性であり、空性は色である。色とは別に空性は無く、空性とは別に色は無い。色なるものこそが空性であり、空性なるものこそが色で

ある。”

受想行識、亦復如是。舍利子、
ジューソウギョウシキ、ヤクブーニョーゼー。シャーリーシー、
（受想行識も、またかくのごとし。舍利子よ、）
“受、想、行、識についても、まったく同様である。シャーリプトラよ、”

是諸法空想、不生不滅、不垢不淨、不増不減。
ゼーショーハウクウソウ、フーショウフーメツ、フークーフージョウ、フーズ
ウフーゲン。
（この諸法は空相なり、不生にして不滅、不垢にして不淨、不増にして不減な
り。）

“存在するものはすべて空性を特徴としていて、生じたというものでなく、滅
したというものでなく、穢れたものでなく、穢れを離れたものでもなく、足り
なくなることなく、満たされることも無い。”

是故空中、無色無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無眼界乃至無
意識界、
ゼーコークウヂュウ、ムーシキムージューソウギョウシキ、ムーゲンニービー
ゼツシンニー、ムーシキショウコウミーソクホウ、ムーゲンカイナイシームー
イーシキカイ、

（この故に空性の中に、色は無く受想行識無く、眼耳鼻舌身意無く、色声香味
触法無く、眼界無く、ないし意識界無く、）

“これ故に、空性に於いては、色は無く、受・想・行・識無く、眼耳鼻舌身意
無く、色声香味触法も無い。眼界から意識界に至るまで、ことごとく無い。”

無無明亦無無明尽、乃至、無老死亦無老死尽、無苦集滅道、無知、亦無得。
ムームーミョウヤクムームーミョウジン、ナイシー、ムーロウシーヤクムーロ
ウシージン、ムークージュウメツドウ、ムーチー、ヤクムートク。

（無明無く、また無明の尽くこと無く、ないし、老死無く、また老死の尽く
ること無く、苦集滅道無く、知無く、また得も無し。）

“明知無く、無明無く、明知の滅無く、無明の滅も無い。老死無く、老死の滅
も無い。苦・集・滅・道無く、知ること無く、得ということも無い。”

以無所得故、菩提薩埵、依般若波羅蜜多故、
イームーショートッコー、ボーダイサッター、エーハンニャーハーラーミーター
ーコー、

（得る所無きをもつての故に、菩提薩埵は、般若波羅蜜多に依るが故に、）

“これ故に、ここには如何なるものも無いから、菩薩は般若波羅蜜多を拠り所
として、”

心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、遠離一切顛倒夢想、究竟涅槃。

シンムーケーゲー、ムーケーゲーコー、ムーウクーフー、オンリーイッサイ
テンドウムーソウ、クーギョウネーハン。

（心に罣礙（けいげ）無し、罣礙無きが故に、恐怖あること無し、一切の顛倒
夢想を遠離して、涅槃を究竟せり。）

“心の妨げなく安住している。心の妨げが無いので、恐れが無く、無いものを
あると考えるような見方を超越していて、まったく開放された境地でいる。”

三世諸仏、依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提。

サンゼーショーブツ、エーハンニャーハーラーミーターコー、トクアーノクタ
ーラーサンミャクサンボーダイ。

（三世の諸仏は、般若波羅蜜多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえ
り。）

“過去・現在・未来の三世に出現するすべての仏は、般若波羅蜜多を拠り所とし
て、無上の完全な悟りを成就している。”

故知、般若波羅蜜多、是大神咒、是大明咒、は無上咒、は無等等咒、
コーチー、ハンニャーハーラーミーター、ゼーダイジンシュウ、ゼーダイミョ
ウシュウ、ゼームジョウシュウ、ゼームトウドウシュウ、

（故に知るべし、般若波羅蜜多は、これ大神咒（だいじんしゅ）なり、これ大
明（だいみょう）咒なり、これ無上咒なり、これ無等等（むとうどう）咒なり、）

“それ故に、知るべきである。般若波羅蜜多の大いなるマントラ、大いなる明
知のマントラ、この上ないマントラ、比類なきマントラは、”

能除一切苦、真実不虛故、説般若波羅蜜多咒。即説咒曰。

ノウジョーイッサイクー、シンジツプーコーコー、セツハンニャーハーラーミ
ーターシュウ。ソクセツシュウワツ。

（よく一切の苦を除き、真実なり、虚しからざる故に、般若波羅蜜多の咒を説
く。即ち、咒を説いて曰わく。）

“すべての苦を鎮めるものであり、偽りが無いから、真実である。般若波羅蜜
多の修行で唱えるマントラは、次の通りである。”

掲諦、掲諦、波羅掲諦、波羅僧掲諦、菩提、娑婆訶。

ギャーテイ、ギャーテイ、ハーラーギャーテイ、ハラソウギャーテイ、ボーデ
ィ、ソワカー。

“ガテー、ガテー、パーラガテー、パーラサンガテー、ボーディ、スヴァーハ
ー。”

般若心経。

ハンニャーシンギョウ。

“以上で、般若波羅蜜多のマントラ、提示し終わる。”

.....

建：般若心経の世界最古のサンスクリット写本が残っていたのは、何と、法隆寺なんだよ！さすが、秦氏の本拠地の1つだ。聖徳太子はイエスをモデルとしているしね。

ひかり：ということは、「生命の樹」はイナンナが掛けられた木が原型だけど、イエスが掛けられた十字架も重ねられているのね？

建：まあ、般若心経の解説自体、難しいもののように思えるけど、一言で言えば“完全なる知恵に到達するためのマントラ”で、「生命の樹」の奥義を知ることなのさ。

“従来の固定観念に縛られることなく、無我を認識することにより（照見五蘊皆空）心に妨げが無い状態（心無罣礙）となり、「生命の樹」を上昇していく（遠離）ことができる。そして知恵を得て超越したものの見方ができるようになり（究竟涅槃）、神界の真理（阿耨多羅三藐三菩提）に至る。

瞑想の際に唱えるマントラは、“ガテー、ガテー、パーラガテー、パーラサンガテー、ボーディ、スヴァーハー”である。これは“知恵という完成”を讃えるマントラである。“知恵という完成”とは、一般的な知恵を超越して、「生命の樹」に隠された真理を知ることには他ならない。”

だから、般若心経は観自在菩薩が弟子のシャーリプトラに説いている情景描写なんだが、「観自在」とは“達観して物事を観ることができる”“すべてを見通す目”の象徴なんだよ！

ひかり：般若心経にそんな意味が隠されていたなんて…。

建：釈迦は16歳で結婚して妃ヤショーダラーとの間にラーフラをもうけたが、人生に疑問を抱き、29歳で一切を捨てて出家した。釈迦は断食などの苦行を行っていたが、苦行が無意味であることを悟り、村娘スジャータの捧げる牛乳粥で体力を回復した後、ブッダガヤにあるアシュヴァッタ樹（インド菩提樹）の下で瞑想した。そして夜明け近く、“明けの明星”が輝く頃、35歳でついに悟りを開いた。

人生の最後は、クシナガラ郊外で迎えた。そこには、東西南北に2本ずつのシャーラ（沙羅樹）が生えていたので、この木を沙羅双樹と呼ぶようになった。シャーラとは、優れた木、堅固な木の意味で、沙羅はそれを音写したもの。釈迦は2本のシャーラの間に横たわり、80歳で入滅した。遺体は火葬され、遺骨（仏舎利）はストゥーパに納められると同時に、信者に分け与えられた。

釈迦は、「生命の樹」の奥義を知るには、苦行は無意味であると悟った。アシュヴァッタ樹も沙羅双樹も「生命の樹」の象徴さ。2本のシャーラの間に横たわって入滅したことは、「生命の樹」と「知恵の樹」の「合わせ鏡」でもある。

このような釈迦の生涯は、イエスのものと類似している。何よりも、悟りを開いた時には“明けの明星”が輝いたことが、それを最も端的に暗示している。

このように、般若心経には死んだ者の魂が到達すると言われている彼岸や

涅槃などについて述べた部分は無く、死者にはまったく関係の無い内容なんだ。まして、観自在菩薩は現世の在家求道者で、天国で救ってくれるような存在ではないんだよ。

ひかり：ねえ、その最も重要なマントラ“ガテー、ガテー、パーラガテー、パーラサンガテー、ボーディ、スヴァーハー”が“知恵という完成”を讃えるマントラとは言うけど、その核心の意味は何なの？

建：ガテーとは、女性名詞ガター（行きたる女性）の呼びかけの形。“行きたる女性”とは悟り、つまり、般若に他ならない。ここでは般若が女神と考えられているんだよ！

パーラガテーは“向こう岸に行った女性（女神）よ”を、パーラサンガテーは“向こう岸に行き着いた女性よ”を意味する。ボーディは“悟りよ”のことで、スバーハーは掛け声だ。



北インド・ラダック・アルチ寺院の女神・般若波羅蜜多の壁画

現存する最古の心経のサンスクリット写本には「般若波羅蜜多の心」とあり、「経」の文字は無い。この心（フリダヤ）とは真言を意味する。つまり、心経はいわゆる経ではなく、女神・般若波羅蜜多の称名を勧めるメモなんだ！

“行きたる女性”“向こう岸に行った女性（女神）”“向こう岸に行き着いた女性”が悟りの知恵を得た女性・女神ならば、それは知識の“メ”を得た知恵の女神、“メ”のレディ、イナンナに他ならず、知恵の女神で豊穡神、インダスの最高神イナンナへの讃歌に他ならない！

ひかり：道理で、イナンナが掛けられた木、イナンナが好物だったナツメヤシが原型となっている「生命の樹」の真理を悟る内容なわけで、イナンナが掛けられた「生命の樹」の象徴たる十一面観音に対して唱えられることは最も相応しいわね！インダス文明の創造神はイナンナだから、当然と言えば当然よね。

建：もっと広い視点から見ると、女神を宇宙の女性原理と見なせば、その女性

原理と波動で共鳴する、ということでもある。女神ガイアもそれに共鳴するわけだ。だから、唱えること自体に意味があるのさ。

ひかり：深すぎる…。

建：般若心経はこういう意味なんだが、その真意からすると、シヴァが好んだ修行や苦行も意味を持ってくる。

ひかり：どうということ？修行なんか、悟りを開くのには不要じゃないの？

建：実はこのマントラには更に意味が隠されていて、“行きたる”“向こう岸に行った、行き着いた”をイナンナの奔放な性的側面から解釈するならば、“性的に愉悦を得た女性、女神”ということでもある！“聖なる結婚の儀式”の大元であるイナンナに相応しいね…。

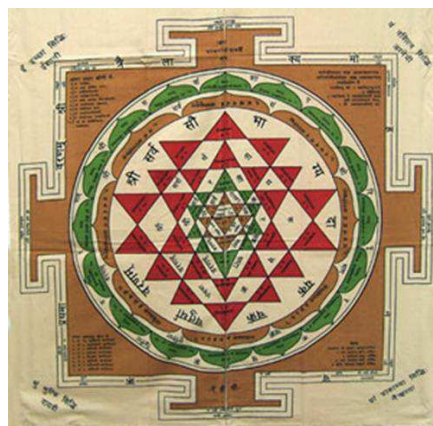
ひかり：つまり、…イッチャった女神、てこと？（顔を赤らめる。）

建：（笑。）聖婚では、イナンナの相手のほとんどは、朝には死んでいただろ？だから、イナンナ様を歓ばせるためには、肉体的・精神的に鍛え上げなければならぬんだ！シヴァのシンボルはリングだろ？

ひかり：修験者って、そんな人たちだったわけ。。。ありがた〜いお経だと思って聞いていたのに。。。。

⑩ヤントラ

プラクリティの振動を視覚的に表現したものをヤントラと言う。基本図形は正方形で、その中に幾つかの同心円があり、蓮華の花弁が16枚や8枚で描かれている。更に、その内部に上向きの三角形と下向きの三角形が重なり合うように描かれている。この中で最も重要なのは、三角形である。上向きの三角形はプルシャ、下向きの三角形はプラクリティであり、重なり合っていることにより陰陽の無限の合一を象徴する。その基本形は、六芒星（ダビデの星）である。つまり、ダビデの星は、陰陽の合一で太極を表す。この三角形が変形されて巴となり、2つの巴が向き合って重なって1つの円形となっているのが、太極マークである。



ヤントラは後に曼荼羅となった。曼荼羅とは“円”を意味し、タントラの宇宙観を表現しており、円は終わり無き“永遠”を象徴するシンボルである。そして、曼陀羅は三神三界を表した「生命の樹」の象徴でもある。マントラ、ヤ

ントラは永遠なるもの＝宇宙創造の意識と一体となる＝梵我一如を達成する秘術と見なされている。

ひかり：ヤントラは、カバラを図形で表したものなのね？

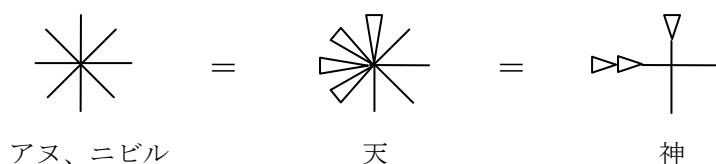
建：良く解ってきたようだね。さっきも少し触れたけど、蓮の花はエジプトでは“再生”を表し、“復活、再生”の象徴なんだ。日本で花と言えは“桜”を示すように、エジプトで花と言えは“蓮”というほど、ポピュラーなんだよ。そして、古代種の蓮には16枚の花弁を持つ種類もある。

これが中東ではロゼッタ紋様として知られていて、いろいろな所で見られる。これはナツメヤシの花で、知恵と豊穡の女神のシンボルなんだよ、中東では。そして、学名はフェニックスで、フェニキアのことでもある。

ひかり：イナンナね！



建：ああ。ナツメヤシが「生命の樹」と見なされたし、“復活、再生”の大元はイナンナだから、当然、イナンナのシンボルとなる。そして、イナンナの象徴は金星＝ヴィーナスだが、金星は八角形の図形として象徴される。八角形はまた、アヌとニビル、イエス（ベツレヘムの星）の象徴でもある。



アヌとニビルの象徴としての八角形が変形され、天を象徴する記号と神を象徴する十字型になっている。つまり、これらの象徴図形は大神アヌとニビルの象徴であると同時に、シュメールの神々をも象徴しており、シュメール語では“ディンギル”と読む。そして、十字架や卍の原型でもある。

特に八角形や八芒星はアヌのお気に入りだったイナンナの象徴ともされ、彼女に因む金星も同じ象徴となる。金星はニビルから見て8番目だしね。ま

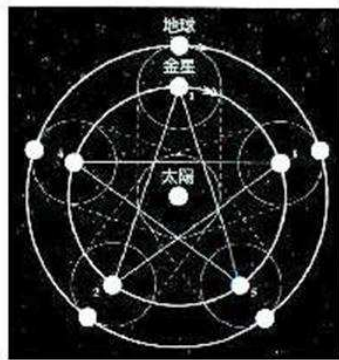
た、「生命の樹」に於ける最も重要なセフィラ、ティファレトは“美”を表すが、これも“美の女神ヴィーナス＝イナンナ”に由来することを暗示しており、集まるパスの数が8本で、この八角形を象徴している。そして、数字の“8”を横向きにすると“∞”となり、数学の無限記号、すなわち“永遠＝不老不死”を表す。

ひかり：イナンナのシンボルに相応しいわね。

建：しかし、金星の意味はこれだけではないんだ。それ自体に、ちゃんと八芒星の意味が隠されている。更に言えば、五芒星の意味も、だ。

太陽、金星、地球が一直線に並ぶ時がある。これを合（ごう）と言い、合には内合（太陽－金星－地球）と外合（地球－太陽－金星）がある。

金星の内合は584日毎に起こり、8年間で5回起きる。つまり、1回につき地球年で8/5年ということ。だから、地球の公転軌道を5等分すると、内合の位置は軌道上で8/5周ずつずれていくことになる。それを順に結ぶと五芒星が形成される。



五芒星



八芒星

一般的には観測により会合周期を調べ、ケプラーの法則に従って公転周期を計算する。金星の公転周期は224.7日。この公転周期より、地球が太陽を8周する間に金星は13周するから（ $8 \times 365 \div 13 \times 225 \div 2,920$ ）、地球が1周した時には、金星は13/8周＝（1+5/8）周進んだ位置になる。よって、地球の特定の日の金星の位置を8年分繋げると、軌道上に八芒星が描かれるんだ。

つまり、地球の8年は金星の13年に相当し、会合周期を結んでいくと軌道上に五芒星が形成され、地球と金星の公転の位置関係を結んでいくと八芒星が形成されるということさ。

ひかり：ひえ～っ、驚きね！

建：この八芒星を金星とイナンナのシンボルとし、五芒星をこのような天体の深い知識を知ること、すなわち、知恵のシンボルとしたんだ。だから、五芒星は“ソロモンの知恵”と言われるほど賢者だったソロモン王に因んで“ソロモンの星”とも言われる。太陽神ウツのシンボル六芒星は、そのソロモンの父ダビデに因んで“ダビデの星”なんだ。

ひかり：日本でも陰陽師の巨人、安倍晴明を祀る晴明神社や、賢人・聖徳太子に縁の広隆寺に五芒星が掲げられているのも、“カバラの知恵を悟った賢者”だからね？

建：その通りさ。天体をも巻き込んだこんな“知恵”を仕組んだのは…

ひかり：天才科学者ニンギシュジッダ以外に居ないわ！

建：だから、ケツアルコアトルとして崇拝されたマヤの暦では、金星の動きが非常に重要視されているんだよ。神宮の暦も、金星の動きが事細かに記されている。他にも、何か気付かないか？

ひかり：5と8…足して13ね…あつ、イエスと12人の使徒！

建：だから、イナンナと重ねられるイエスのシンボルも“明けの明星＝金星”なのさ。ついでに言うと、イエスが誕生した時に天空に輝いたとされるベツレヘムの星も八芒星で表されるが、これはニビルの象徴の方だよ。

先ほどの続きだが、“ ∞ ”を3次元的な立体で表現すると“メビウスの輪”となる。これは裏も表も無く、ある点から表面をなぞっていくと、最終的にその開始点に戻ってしまう。つまり、阿吽で、大神アヌやニビルを暗示する。

ひかり：それに、最初はアルファで最後はオメガだから、“私はアルファでありオメガである”と言ったイエスをも暗示するのね！

建：イエスはギリシャ語のゲマトリアとしては“888”となる。これは、その“私はアルファでありオメガである＝ ∞ ”という言葉に隠された“8”、その誕生時に天空に輝いた八芒星ベツレヘムの星＝ニビルの“8”、そして、シンボルとしての明けの明星の“8”でもある。

しかし、その原型のイナンナを見れば、“不老不死＝ ∞ ”に隠された“8”、大神アヌに愛されたシンボルとしての八芒星＝ニビルの“8”、そして、シンボルとしての金星の“8”でもある。

つまり、シンボリックにイエスとイナンナはまったく一致するわけだ。

ひかり：イエスの原型はイナンナだから、すべて辻褄が合うわ！

建：この八芒星が十六紋菊に繋がるんだ。ナラム・シンの戦勝記念碑に描かれているのは金星なんだが、後光が差して十六芒星となっている。金星は先端が尖った三角形の光を放つ八芒星で表現されていて、その間に、四角で後光が表現され、全体として十六芒星として表現されている。ナラム・シンはイナンナの忠実な僕だったよね？

ひかり：そうだったわね。

建：だから、この十六芒星はイナンナのシンボルなんだよ。これがエジプトで“復活、再生”を象徴する蓮と合わされて、ロゼッタ（あるいはロゼット）と呼ばれるようになったのさ。

ひかり：確か、他にもメリトアメン王女像の胸には十六花卉のロゼッタが刻まれているし、有名なツタンカーメンの遺品やアメンヘテプ3世の遺品でも、十六花卉のロゼッタが多数確認できるわよね。ラムセス3世などは、八花卉のロゼッタだけど。

建：メソポタミアでは、アッシュル・ナシルパル2世の浮彫が解り易いね。左腕の部分拡大すると、はっきりと十六花卉ロゼッタが確認できる。



ひかり：これほど中東にたくさんあるのなら、イラクの故フセイン大統領が「これは我が国に古くから伝わる紋章である」と言っていたのが納得できるわね。

建：逆に言えば、それだけ核心的な物がたくさんイラクにはあったわけだ。だから、世界を裏から仕切っていた国際金融資本は、ありもしないことをでっち上げてイラクに侵攻し、真っ先に博物館から粘土板を根こそぎ奪い去って行ったのさ。

ひかり：これと太陽神ウツのシンボル六芒星と一緒に存在するとなると、大変なことだわ！

建：例の、神宮石灯籠に刻まれた菊の御紋と六芒星のことだね…。あれを見て、皇室はユダヤ人だ、と言っていた日ユ同祖論の人たちがたくさん居たよね。では、何故、そんなものを神宮の近くにだけ置いて、皇居や明治神宮、下鴨神社など他の重要な所にも置かなかったのか？そんなことは、微塵も考えていなかった。



ひかり：日本＝ユダヤということだけしか頭の中に無かったから、そのシンボルを見たら、思考停止になっちゃったのね？

建：そうなんだよ。確かに、皇室＝ユダヤということはあるだろう。しかし、それだけではない。何故、神宮にしか無いのか？

ひかり：ウツは太陽神だから、天照大神の原型と言えるわ。そして、イナンナは豊穰神だから、豊受大神の原型と言える…。しかし、御正殿の鯉木の数などが暗示しているのは、内宮は女神、外宮は男神で矛盾しているけど…あっ、「合わせ鏡」だ！

建：だから、内宮は女神、外宮は男神で良いのだ！

ひかり：つまり、菊の御紋は外宮の豊受大神＝イナンナ、六芒星は内宮の天照大神＝太陽神ウツを暗示していたのね！

建：この国の根源が見えてきたようだね…。更に、イナンナと重ねられるイエスは、シンボルとしては十字架で、陰陽で言えば閉じた形で陰だから、カバラのシンボリックには女神扱い。だから、カバラ的に外宮ではなく、内宮に重ねられた。それに、イエスは人類の贖罪を一手に背負い、人類にとっての光となったわけだからね。

ひかり：啞然とするほど鮮やかな仕掛けね。。。。

建：実は、もう一箇所、この対のシンボルが隠されている有名な場所がある。

ひかり：えっ！どこなの？

建：鞍馬だよ。

ひかり：確かに、境内には大きな六芒星が描かれているわ。けど、対になった菊の御紋なんて無かった気がするけど…。

建：奥の院には、650 万年前に地球を守るために金星から飛来したとされるサナト・クマーラが祀られているよね？

ひかり：それは、神智学が大好きだった官長さんが後から追加したものよね？

建：普通に聞いたら、おかしい話さ。しかし、“万年”はカバラ的には“たくさん”という意味だから、省略しても構わない。そうすると、“65”が残るが…

ひかり：足すと 11 だから、十一面観音！これはイナンナが原型よね？…で、金星？えっ、何よこれ？！出来過ぎじゃない！

建：1,850 万年前という説もあるが、わざわざ 650 万年前としている点がミソなんだ。そして、サナト・クマーラは地球の中心にいとされる説もある。

ひかり：それは、封印を暗示している…？封印されたイナンナ…ウシトラノコングジン！

建：鞍馬はウシ若丸が修行したとされている地だろ？

ひかり：あっ、ウシがある！

建：その牛若丸は京の五条の橋で弁慶と一戦交えたが…

ひかり：弁慶は千本目の刀を奪えなかった。

建：仏像で千と言えば…

ひかり：千手観音でしょ？…あっ、千手観音は十一面観音でもある！てことは、牛若丸と弁慶の話も…。

建：ああ。また、スーフィーのムスリムでは、サナト・クマーラはアル・ハデ

イル（緑の人）とも見なされているらしいよ。

ひかり：イナンナが原型のシヴァは、青黒い肌よね…それが緑へと…そうなる
と、青鬼と緑鬼！

建：それに鞍馬ゆかりの天狗、すなわち、ユダヤの赤ら顔を加えたら…

ひかり：青鬼、緑鬼、赤鬼だ！

建：サナト・クマーラはサンスクリット語で“永遠の若者”を意味し、16 歳だ
とも言われている。

ひかり：“永遠”はイナンナが根源だし、“16”はイナンナが原型のロゼッタで、
十六紋菊よね？だから、菊の御紋はそのままではなく、奥の院に祀られ
たサナト・クマーラ！

建：あそこの六芒星を見て、スピリチュアル系の人のほとんどが、サナト・ク
マーラあるいは宇宙人が UFO で着陸した基地だ、なんて言っていたけど、彼
らは結局何も“見えていなかった”わけだ。

ひかり：誰もこんなこと、気付かないわよ！

建：（笑。）そもそもあそこは松尾山と言い、インドのクベラが仏教に取り入れ
られた毘沙門天を祀る。毘沙門天は邪気を祓う北方の武神だから、北方が領
地だった戦いの神イシュクルが原型で、イシュクルと仲が良く、戦う女神だ
ったイナンナが重ねられたと言える。それが鞍馬になり、“その時”が近付
くに連れ、封印を解くための鍵として、サナト・クマーラが勧請されたのさ。
だから、こうやって“謎解き”ができる。

ひかり：まさか、神宮の謎を解く鍵が鞍馬の大魔神にあるとは…。まさしく大
魔神復活ね…恐るべし、烏天狗！

(4) カナン（フェニキア）

①歴史

カナンの歴史はシュメール時代にまで遡る。“海の民”の侵入があったが、そ
の後、著しく発展している。ヒッタイトも BC1,200 年頃、“海の民”によって本
拠地を追われた。

古いカナン暦では、秋分の頃（現行暦の 9～10 月頃）から 1 年を数え始めた。
この時期は雨が降らない夏が過ぎ、秋の雨が降り出して、種まきを始める時期
である。ダビデ王国以後もこの暦が採用されていたが、BC604 年頃のエレミヤ書
に依れば、1 年は春から始まるように変えられた。これはバビロニア暦の影響で、
この直前にネブガドネザル 2 世がエジプト軍を破っており、カナン地方が新バ
ビロニアの勢力範囲に入ったためである。

エジプトは当時（BC13 世紀頃）、カナンのことを“フル”と呼んだ。これは、
フルリ人に由来する。アッカド王朝時代、アルメニア地方を起源とするフルリ
人がチグリス川東方からカナン地方まで進出した。（BC18 世紀の出土記録が最も
古い。）風習として、実子が無い時には養子を迎え、その後で実子が生まれれば
その実子が第一相続人となるが、この風習は旧約のアブラハムの子の記述など
に見られる。

カナンの歴史を振り返る時、見逃せないのはエジプトのアマルナ文書に出て

くるハビル人である。ハビルは民族には関係無いグループで、シュメール語でサ・ガズ（破壊者、虐殺者、暴民などの意）と同じ意味である。ウガリト文書ではアピルとされている。彼らは一定の共同体から疎外された人々で、徒党を組んで略奪したりして、乱世を生きぬいた人々で、日本で言えば戦国時代の野武士に相当する。

カナンで活躍したのは他に、ペリシテ人がいる。“海の民”の一派で、おそらくシリア方面から南下して来た。カナン地方が後にギリシャ人によって“ペリシテ人の地方”という意味で“パライスティネ”と呼ばれ、これが現在の“パレスチナ”である。ペリシテ土器には水鳥や尾が魚の尾のような水鳥が描かれている。また、ペリシテ人によって、契約の箱はサウルの時代に奪われたが、ダビデの時代によりやく戻った。

.....
ひかり：フェニキアはシュメールに匹敵する古い地域なのね？

建：ヒッタイトと同様、“海の民”が侵入したことは注目だよ。フェニキアは“海の民”による侵入を受け、その時点から急速に発展している。ならば、この“海の民”は古代先進文化、シュメールの末裔と見なしても良いだろう。つまり、ヒッタイト側に侵入した“海の民”がフェニキアで合流したんだ。ヒッタイトも通説では、BC1, 190 年に“海の民”によって滅ぼされたとされている。

ひかり：古いカナン暦では秋分の頃から 1 年を数え始めた、ということだけど、それって、どういうこと？

建：カナン暦では種まきを始める時期なんだ。ところで、神宮の神嘗祭は“神宮の正月”とも言われており、かつては 9 月に行われていた収穫を感謝する神事なんだよ！しばしば、ユダヤ暦との類似性が言われたが、ユダヤ暦はそれよりも古いカナン暦の影響を受けているに過ぎない。日ユ同祖論者は、誰もそれに気付いていなかった。

ひかり：神宮の神嘗祭って、最も重要な神事でしょ？それがカナン暦に一致するということは…神宮はカナンの神を祀る、てこと？

建：カナンの元々の最高神はエルだった。これは個人神の名称でもあるが、“とても高い神”を意味する包括的用語でもあった。“アブアダム（人の父）”が彼の肩書で、“情け深い、憐み深い”があだ名だった。とても高貴な神でアダムの父ならば、それは人類を創成し、大洪水から人類を救った“情け深い、憐み深い”神エンキに他ならない。これを裏付ける詩がカナンには残されている。「情け深い神の誕生」という詩だよ。

“エルが海岸にいと、2 人の女性が彼のペニスの大きさにうっとりしてしまった。そうして、遊んでいた鳥が浜の上で日光浴をしている間に、エルはその 2 人の女性と交わり、二柱の神シャハル（夜明け）とシャレム（夕暮れ、または完成）が生まれた。しかし、彼らはエルの主要な息子たちではなかった。”

ひかり：これは、以前に聞いた“アダパとティティの誕生”場面が原型となっていることは明白ね…。

建： “アダパとティティの誕生”場面では、生まれた2人は息子（アダパ）と娘（ティティ）で、ここでは2人の息子とはなっているが、いずれも“夜明け”と“夕暮れ”で、生まれた2人は確かにエンキの主要な子ではないから、本筋は同じだね。エルの主要な息子はバールだけど、バールや彼に関わるヤム、アナトの神話はいろいろな神々が場面場面で対応し、それは後にマルドゥクによって改竄された結果だから、詳細はどうでも良いよ。

ひかり：またマルドゥクか…。

建：このように最初はエンキが主神だったけど、後にイシュクルの領地となり、イシュクルはウツ、イナンナととても仲が良かった。だから、イシュクル、ウツ、イナンナが主要三神へと変化し、その後はイナンナが主神となった。

ひかり：だったら、天照大神の原型がウツ、豊受大神の原型がイナンナだから、カナン神が祀られていても不思議ではなく、ある意味、当然なのね…。

建：太古は農作物の種蒔きや収穫の時期を決めるために暦がとても重要で、暦を操る者が王でもあった。だから、暦の源流を調べていけば、どこ由来なのか解るんだよ。

ひかり：日本でも、陰陽師が専門に扱ったわよね。

建：また、カナンはエジプト人から“フル”と呼ばれ、それはシュメール語と日本語に共通する膠着語を話し、シュメール起源のフルリ人がチグリス川東方からカナン地方まで進出したことが起源なのさ。このフルリ人の習慣は、聖書でも最も重要な人物の1人であるアブラハムの子の記述などに反映されているので、かなり重要な民族であることを伺わせる。

後のイスラエル十支族はカナン地方に散らばったわけだが、その後のガド族の大王が祖先に因んで“フル”を名乗ったとしても、それはこのようなことがあったからだ、とも言える。

そして、ペリシテ人は“海の民”の一派とされ、水鳥や尾が魚の尾のような水鳥というのは主エンキを暗示しているから、これもまたシュメールの末裔。そして、主エンキを崇めるペリシテ人は契約の箱を奪ったが、それは契約の箱が“主エンキとの契約”であるからに他ならないとも言える。

このように、カナンには多くの民族が集まり、明らかにシュメール系と思われる民族がある。

ひかり：ということは、シュメール系のフルリ人と“海の民”が重要な役割を果たしているわけね。“海の民”って、どんな人たちなの？海洋民族ということは解るけど…。

建：核戦争の前、エンリルは神聖な場所、第4の地域、“二輪戦車の場所”を守りに行くよう、イブル・ウムに命じたよね？

ひかり：ニブル・キ出身でウリム（ウル）の王の血も引く神官で王族の末裔の、アブラハムね！

建：それに応じて、ハランに居たイブル・ウムは“二輪戦車の場所”、シナイ半島のエル・パランへ向かったが、その直後、マルドゥクがハランにやって来て、人々を扇動した。そのため、“二輪戦車の場所”は破壊されることにな

った。事前にイブル・ウム一族を保護してから、ニヌルタとネルガルによって攻撃された。

ひかり：その後、助かったバビリをマルドゥクが治め、最高神を名乗り、エンリルとニヌルタは離れて行ったわよね…。そこまでで終わっていたけど、その後、どうなったの？

建：エンキは去っていなかった。他に残っていた神々はニンギシュジッダ、ウツ、イナンナ、イシュクルで、あとの神々はエンリルとニヌルタに続いた。ただし、マルドゥクが最高神を宣言した以上、残った神々は表立って出てくることはなく、かつてエンキがジウスドラにしたように、姿を隠したまま、時々お告げを告げる程度だった。主エンキは主に海神として振る舞った。

ひかり：ということは、保護されて地下へ避難していて、地上が安全になってから出て来たイブル・ウム一族をエンキが守護して導いたの？

建：イブル・ウムはウリム（ウル）の王の血も引いていた。そのウリムからは“フルリ、フル”が進出してミタンニを建国した。だから…

ひかり：もう一方の中心的役割を果たした“海の民”は、イブル・ウムの直系ということ？

建：そういうことだろうね…。

ひかり：だから、“海の民”が侵入する毎に、著しく発展しているわけね！

建：その集大成の地がカナン、フェニキアということだよ。この地には後に北イスラエル王国ショムロン（サマリア）が建国されるが、それは“小さなシュメール”という意味なのさ。サマリアはシュメールの末裔が集まった場所で、しかもニブル・キ出身でウリムの王の血も引く神官で王族の末裔が居たからね。その末裔が、後に北イスラエル王国を率いるエフライム族の大王となった！イブル・ウムの祖はアルバカド＝シャルル・キン＝サルゴン1世で、彼はイナンナをレイプしても赦されて王になったほど、イナンナから寵愛を受けていた。だから、その末裔がイナンナが主神の地で王となることは辻褄が合う。

ひかり：え～っ、それって、聖書の話とかみ合わないわよ？

建：ヘブライの民は元々1つで、ソロモンが背教したから分裂したとでも？

ひかり：そう聖書には書いてあるけど…。

建：では、少し話が横道にそれるが、いわゆる聖書学研究で解っていることを説明しよう。

②北イスラエル王国と南ユダ王国の本当の関係

ヘブライの有名なダビデ王に関わる物は、実は何一つ発見されていない。旧約自体、後代の加筆や編集の跡が多く見られ、場合によっては一節毎に、いつの時代にどんな人たちが書いたのかを考えながら読む必要があり、さもなくば、話が重複したり矛盾したりして、理解できない。例えば、歴代誌にあるアダムからダビデに至る系図などは、ずっと後代に書かれたもので、すこぶる人為的なものである。

ダビデはサムエル記にも“ベツレヘム（パンの家、の意）の人の息子”としか書かれておらず、ユダ族出身、などという根拠は何も無い。サムエル記には、

ペリシテの武将たちがダビデとその兵を“このイブリーたち”と呼んでいる。イブリーとは、元来“ロバによる隊商の長”という説があり、奴隷の場合もあり、傭兵の場合もあり、ハビルと大変類似している。彼らの特徴は、公道上の略奪は名誉ある武勇談であり、戦いの旗色を見て、都合の良い者に味方した。ダビデはペリシテに属しながら、南部の遊牧民族を襲って略奪を行い、私有財産を増やした。そして、その一部をユダ部族（南のユダ王国）の長老たちに贈り、友好関係を結んだ。

（北）イスラエルの諸部族は元々南部の諸部族（ユダ王国）と対立していたが、サウルの死後、ユダ部族はヘブロンに居たダビデを王とし、ダビデは南部ばかりではなく北部まで手中にした。そして、王都をヘブロンからシオンへ移動し、ダビデはユダの家の王とイスラエルの王とを兼ねることになった。

ダビデの特異性は即位にも現れている。サウルの即位は、神の人サムエルが神のお告げに基づいてサウルに油を注いで聖別した。しかし、その後のダビデの即位には聖職者は関わらず、ユダの人々もしくはイスラエルの長老たちが聖別した。その子のソロモンになると、ダビデ自らが即位を命じた。

また、ダビデは契約の箱をダビデの町に戻す際、エフォド（エポデ）を身に付けていたが、これは本来、神官が神のお告げを伺う時に用いた祭具であり、俗人が用いることは許されなかった。このように、ダビデは自ら神官の役目まで行い、宗教的権威まで手中にした。

忘れてならないのは、エルサレムの神殿も王宮も、すべてはフェニキアの都市テュロス（ヘブライ語ではツォル）の王の援助が無ければできなかった、ということである。

ダビデと同様に、モーゼは旧約の中ではっきりとした人物像として描かれているが、歴史学的・考古学的証拠は無い。史料というものは、そこに“書かれてある時代”よりも、“書かれた時代”そのものを反映している。例えば過越の祭りの記事は、バビロニアから帰還した捕囚の民が記したものであり、バビロンの新年祭を思い起こし、それとモーゼのエジプト脱出に因んだ過越の祭りを結び付けたものである。

.....
ひかり：ひゃ～、聖書信奉者には、かなりショッキングな内容ね！ダビデが盗賊の首領で、ユダ族とは何の関係も無いなんて…。

建：ダビデとその兵は、先ほども出てきたハビルだったんだよ。ダビデはその棟梁ということ。しかし、当時は悪い意味ではなく、英雄視されていたんだ。だから、様々な部族を束ねることができた。むしろ、それほどの統率力が無いと、様々な部族が乱立するあの地域を治めることはできなかった、ということさ。シュメール語でサ・ガズ（破壊者、虐殺者、暴民などの意）などと呼ばれていたのは、ある部族から見た敵対意識やジェラシーの裏返しなんだ。20世紀後半から21世紀初頭まで、中東から北アフリカにはいわゆる独裁者と決めつけられた人たちがいたが、あのような強い人物がいなければ、あの

地域は治まらないのさ。その敵対心やジェラシーをイルミナティの連中が利用して扇動し、“英雄”を暗殺させたのさ。

ひかり：ソロモンが背教したためではなく、北と南は元々仲が悪かったから、ダビデというタガが外れると、即座に分裂したのね…。この方が、よほどすっきりとした解釈になるわ。それと同じような現象が、ついこの前まで、中東から北アフリカで起きていた、というわけか…。

建：そして、エルサレムの神殿や王宮がフェニキア（カナン）の援助無しには建造できなかったことは、北イスラエルの方が文化的・芸術的に優れていたことを伺わせる。特に、ダビデがフェニキアの南にある“海の民”のペリシテに属していたことは注目すべきで、ダビデがユダ族とは何の関係も無いことも合わせると、いわゆる“ダビデの星”とされる六芒星はユダ族のシンボルなどではなく、むしろ、北イスラエルの方に縁がある、と考えるべきだろう。その北イスラエルの地はサマリア＝小さなシュメールだから、六芒星の根源は太陽神ウツのシンボル以外にあり得ない。

ひかり：一般的な歴史解釈では、アッシリアに捕囚された北イスラエルの人々を、南ユダ王国の人たちがサマリア人と呼んで、異端者扱いするようになったのよね？

建：アッシリアは、メソポタミア北部を占める地域で、北部にはミタンニやヒッタイトが控えていた。しかし、勢力を増したアッシリアが北イスラエル王国を滅ぼした時、占領地政策として支配階級の移動を行ったんだ。

アッシリア領の各地からサマリア地方に来た人たちは、土地と地位を与えられ、上流階層として相当の権力を有した。また、それぞれの故郷の宗教も認められたので、サマリア地方は民族的にも文化的にも異国化した。これはある意味、大変意義深いことで、この当時、既に“宗教の自由”が認められていたわけだ。西洋諸国が、19世紀から20世紀にかけて宗教の独立を勝ち得た、なんて誇らしげに言っていたが、何てことはない、2,000年以上も前に達成されていたんだよ。

それはさておき、アッシリアが滅んで新バビロニア王国となると、南ユダ王国は陥落し、ユダ地方はサマリア総督の支配下に置かれた。一般にこの時代以後、彼らは“ユダヤ人”という名称で呼ばれるようになったんだ。ユダヤ教が成立したのは、第二神殿建造の際、エズラがエルサレムで民衆の前で律法の書を読んだ時さ。律法第一主義となったものの、古い史料もあれば新しい史料もあり、そこに矛盾があり、更に口伝の掟や慣習もあるから、後のサドカイ派、パリサイ派などに繋がる分派行動が発生したんだ。

ひかり：陥落した南ユダ王国もサマリア総督の支配下に置かれたことからすると、いわゆる“ユダヤ”の大王家は南ユダ王国のユダ族ではなく、サマリアの大王家、と言っても過言ではないわね？

建：ユダ族の王とされているダビデも、実際にはユダ族とは無縁で、むしろ北イスラエルとの関係が深いことも、それを裏付けるね。

ひかり：サマリアに繋がるフェニキアはとても重要な国だということが解ったわ。以前にも少し聞いたけど、フェニキアという地名は不死鳥伝説のフェニックスに由来して、フェニックスは「生命の樹」であるナツメヤシ

の学名で、その実はイナンナの好物だったわよね？ナツメヤシとの関係は良く解るんだけど、不死鳥の根源は何なの？

③フェニックス

一般的なフェニックスの解釈としては、古代エジプトの想像上の鳥で、“不死鳥”と訳される。フェニックスはアラビアまたはフェニキアに住み、タキトゥスによれば、500年毎に太陽の都ヘリオポリスを訪れ、生命の終わりが近付くと香木を山のように重ねて火をつけ、自らを焼き、妙なる歌声とともに死に至ると言われている。そして、その灰の中から蘇るのが次代のフェニックスであり、同時に2羽のフェニックスはこの世に存在しない。

あるいは、フェニックスのモデルは青鷲ベンヌだとも言われている。ベンヌはヘリオポリスで聖なる鳥とされており、太陽神ラーの象徴である。毎日生まれては（日の出）死ぬ（日没）太陽と同様、死後の復活を表す鳥である。世界各地の伝承では、その涙は癒しをもたらし、血を口にすると不老不死の命を授かると言われている。親鳥が死ぬと幼鳥は没薬でその遺骸を包み、アラビアからエジプトへ運び、その周期は500年とされている。

BC1世紀になると、親鳥の骸から虫が生まれ、それが成長して新たなフェニックスとなる説が誕生した。また、最も有名と思われる復活方法では、500年生きたフェニックスは香料を積み上げ薪の山を作り、その上に横たわり自ら火をつける。やがて、分解した身体の液状の部分が凝固すると、そこから再びフェニックスが誕生するという。（フェニックスが燃えた後の灰には、命を蘇らせる効果があるという。）灰の中から再び幼鳥となって現れるという伝説は、ギリシャ・ローマの著述家によってしか伝えられていない。古代フェニキアの護国の鳥“フェニキアクス”が発祥とも言われている。

フェニックスの食料は一風変わっており、乳香の木やバルサムの樹の樹液、太陽の熱、テティスの風、清らかな水蒸気とされている。生息地はアラビアで、エジプトにその遺骸を横たえたとされている。フェニックスの寿命は500～600年とされている。

.....
ひかり：どうもこの感じからすると、嫌な予感だけど、…またマルドゥクが…
建：その通り！元々は、古代フェニキアの護国の鳥“フェニキアクス”さ。フェニキアの主神はイナンナ。イナンナは“空の旅”が好きだったので鳥にも例えられ、最も有名なのは鳩だよ。これは、イナンナが変化したギリシャ神話の美の女神アフロディーテにも受け継がれ、イナンナが原型のイエスが天から祝福された時に舞い降りて来たのも鳩だった。イナンナはこのように鳥にも例えられるので、それをフェニキアでは国を護る“フェニキアクス”という鳥の名で暗示していた。当然、その名前の大元はナツメヤシで、“復活、不老不死”の意味も込められていた。

“復活”の概念に興味を持って神話をいろいろでっち上げたマルドゥクは

この話を聞きつけ、自ら偶像として拝ませた“空のはしけ船”ベンベンを青鷺ベンヌという鳥にでっち上げ、親鳥が死ぬと幼鳥は没薬でその遺骸を包んでアラビアからエジプトへ運んで来る、ということにしたのさ！

ひかり：本当にどうしようもない奴ね…呆れちゃうわ！

建：そして、すべてをマルドゥクが乗っ取った後、イナンナの始めた“聖なる結婚”の儀式もマルドゥク流に変えられたことは話したよね？それと、イナンナが双子の太陽神ウツに対して火神とも考えられていたことが合わされた。イナンナが創造神だったペルシャではゾロアスター教（拝火教）が出現し、同じく創造神だったインダスではホーマ（護摩）が焚かれることが、イナンナと火の関係を示している例さ。で、後にフェニキアは次のように定義されるようになった。

“フェニキア人とはアシュタルテに生贄として捧げられた聖王のことである。聖王の靈魂は鳥と見なされ、靈魂＝鳥が火葬の炎から再生して天界へ飛翔する。”

アシュタルテとは、フェニキアでのイナンナの名称。ウル第3王朝時代(?)からイシン第1王朝時代(?)にかけ、イナンナは国家祭儀の聖婚儀式で祀られたものの、生贄などという考えは無かった。しかし、マルドゥク流に変えられてからは、1年の平和と豊饒を祈念するために、神に代わって国王が神殿の女祭司と交わったが、実際には、用意された奴隷がその期間だけ王位に就き、これが終わると王の身代わりとして殺害されたんだ。これが生贄の発祥だよ。それが、イナンナの火神としての性質と結び付けられてしまった。更に言うならば、マルドゥクのバビロニアでは性生活は重要な意味を持っていた。性的な節制は不幸の原因になるとして避けられ、性を拒む女性は悪魔の手先とされた。そのため、性的退廃が蔓延し、それが生贄の儀式と結びついていったことは、前にも話したよね？

ひかり：マルドゥクこそ、地獄の業火に焼かれればいい！

建：まあまあ、そう興奮せず…。灰の中から再び幼鳥となって現れるという伝説は、ギリシャ・ローマの著述家によってしか伝えられていないんだが、ギリシャ文明の大元であるクレタ(ミノア)文明はイナンナが築いた。だから、イナンナに関わるフェニックス＝不死鳥伝説がギリシャ・ローマの著述家によってしか伝えられていないということは、謎を解く1つの鍵でもある。

ついでに、フェニックスという言葉は他に“紫”の意味も持つ。これは、赤紫色の染料で染めた衣服は最も高貴な身分を象徴するが、この染料はフェニキア特産の貝紫から赤紫の色素を抽出したもので、フェニキア人はこの貴重な色素で財を築いたからなんだ。

ひかり：皇室でも最も貴い色は紫よね？

建：だから、フェニキアは重要なんだ。

ひかり：ところで、フェニックスの中で気になる点があるんだけど…。

建：何？

ひかり：フェニックスは乳香を食べ、遺骸は没薬に包まれるのよね？これって、

イエスが誕生した時に、東方の三博士が持って来た物と一致していない？

建：良い所に気付いたね…。これに黄金が加われば、そのものだよ。

ひかり：イナンナがイエスの原型ということは、新約に登場するこの 3 品は、イナンナ由来のフェニックス伝説に何か関係ありそうね…。

建：そこまで言われたらしょうがない、説明しよう！

まず乳香だが、フェニックスが食べていたということは、イナンナを暗示する。そのイナンナが愛したドゥムジの遺体には赤い経帷子が着せられ、イエスは赤い外套を着せられたが、それは高貴な身分を表す赤紫の色素を意味する。それはさっきも言ったように、色素としてのフェニックスさ。つまり、ドゥムジの“復活”を願い、「生命の樹」のナツメヤシが好きだったイナンナを象徴しており、イナンナ－ナツメヤシ－フェニックス－乳香－復活という繋がりが、また、ナツメヤシの赤紫－赤い経帷子、赤い外套－ドゥムジ、イエスという繋がりが明確なわけさ。

ひかり：乳香には、ドゥムジも暗示されていたのね！

建：没薬については、ローマとギリシャの神話が鍵だ。ローマには次のような言い伝えがある。

“アドニスの母、太陽神、素晴らしい仲裁の神、彼女は木の中へと変えられていき、その息子は神聖なものとされた。もし母が木だったら、息子はその木に掛けられなければならない。彼は神の枝となって、翌日生まれるかもしれないからである。”

“木に掛ける”というのは、イナンナがドゥムジの遺体を埋葬するために、姉エレシュキガルが管理している“下の方のアブズ”に行った際、杭に吊されたが、エンキの密使により“死んだ”はずのイナンナが蘇ったことが原型になっていた。ここで重要なのはアドニスさ。アドニス信仰の起源は西アジアだが、アドニス神話と言えはギリシャ神話の方が一般に知られており、ここでは次のように言われている。

“フェニキア王キニューラスの娘ミュラーはとても美しい娘だったが、父親に恋してしまった。禁断の恋をしたミュラーは、顔を隠して父の元に通うも、ついに正体がばれてしまった。激怒して娘を殺そうとする父から逃げ続け、疲れ果てたミュラーは没薬の木（ミルラ）に姿を変えた。そのお腹には赤子がいたので、美の女神アフロディーテは木となったミュラーから赤子アドニスを取り出した。

アフロディーテは赤子のアドニスを箱に入れ、冥府の女神ペルセポネに託した。これは、他の女神から隠すためとも、単に子育てができないからとも言われている。しかし、美しく成長したアドニスにペルセポネは心奪われ、アフロディーテが彼を返すよう求めても、それに応じなかった。アフロディーテはゼウスの下で裁判を起こし、結局、アドニスは 1 年の 1/3 をアフロディーテと、他の 1/3 をペルセポネと過ごし、残りの 1/3 は自分の好きなように過ごすこと

と決定された。結局、アドニス自分の自由に使える時間もアフロディーテと過ごすようになった。

アドニスは狩が好きな青年で、ある日狩をしていると、獐猛な猪の牙にかかって死んでしまった。アフロディーテはアドニスの死をひどく悲しみ、彼の血からアネモネの花を咲かせた。そして、自らの涙は薔薇の花になった。”

これは、“イナンナの冥界下り”の変形だね。アフロディーテはイナンナ、アドニスはドゥムジ、冥府の女神ペルセポネはイナンナの姉エレシュキガルだよ。そして、獐猛なイノシシはマルドゥクで、アフロディーテの涙のバラの花はイナンナのシンボル、ロゼッタだよ。また、“アドニスの母、太陽神”もイナンナだから、イナンナは太陽女神でもある！

ひかり：ということは、…アドニスが没薬の木から生まれたわけだから、没薬はドゥムジを暗示するわけね！

建：その通り！だから、フェニックスの遺骸が没薬で包まれることは、イナンナとドゥムジが一体になること、すなわち、“聖なる結婚”を暗示している！

ひかり：素晴らしいわ！2人はニビル人だから、ニビルの象徴である黄金で…

建：東方の三博士の贈り物が揃うわけだ！更に、このアドニスには驚くべき仕掛けがある！

ひかり：なになに？

建：アドニスという名の由来は、ヘブライ語の“アドーナイ”、フェニキア語の“アドーン”という“主”を表す言葉が固有名詞になったもので、ヘブライ語、フェニキア語はいずれも西セム語だよ。バアルと同じで、元々は神の名を直接呼ばず、“主”と呼ぶための名詞だったんだ。

アドニスに繋がる信仰があったのはレバノンの谷、イブラヒム川、その上流にあるイシュタル（イナンナ）神殿あたりではないかと言われている。この周辺で行われたのがフェニキアの主都市ビュブロスのアドニア祭（フェニキア、レバノンの春祭り）で、この祭りとギリシャで行われたアドニア祭は、共に青年神の“復活”を喜び、その死を悼むという性格に於いて一致している。

そして、アフロディーテの“アドーン（我がいとしい人よ）”と呼ぶ声が、アドニスという青年の名になったともされている。

つまり、アドニスはドゥムジのことで、ヘブライ語の“主”を意味する“アドーナイ”は、イナンナが愛するドゥムジと呼ぶ声だったんだ！そして、主都市ビュブロスはセム族の女神が祀られていた最古の古代都市の港町で、旧約ではゲバルと呼ばれ、現在のジュバイル。それはパピルス意味する古代ギリシャ語“Byblos”に由来し、聖書の英語“Bible”は、この都市に因んだものなんだよ！

ひかり：道理で、聖書信奉者はこの前の降臨後に発狂してしまったわけなのね…。

建：女神が祀られた港町、というのが重要だね。つまり、イナンナを祀った“海の民”の町さ。それに、“アドーン”は“アドン、アド”に通じるが、何かピンとこないかい？

ひかり：“アドン” “アド” …

建：ヒントとしては、…皇室御用達のデパート高島屋の創業者は、滋賀県の安曇（あど）川一帯の出身なんだよ。

ひかり：漢字で書くと“安曇”？だとすると、諏訪の安曇（アズミ）氏に通じるわ！

建：その諏訪で有名なのは…

ひかり：海宮一族と同族と諏訪大社の御柱祭ね！

建：後で話すが、イナンナの亦名はアシェラで、アシラと変化し、そこに“h”が付いて“柱”の語源になった。

ひかり：御柱祭では、柱を乗りこなした男が英雄とされるから、柱がイナンナの暗示なら、この祭りが行われる安曇（あずみ）はアド、つまり、ドゥムジの暗示で、…イナンナとドゥムジの聖なる結婚！？

建：御柱は神聖な柱だが、一旦清めた柱に人が乗るし、祭りで死者が出ても、その柱を変えることはしない。これは、神宮の御木曳きなどからすると、考えられないことさ。が、御柱祭では問題無い。

柱が神殿へ捧げる柱ではなく、イナンナを暗示し、英雄とイナンナとの“聖なる結婚の儀式”では、朝には英雄はほとんど死んでいた。柱に男衆が群がって乗っているのは、女神イナンナに乗っていることに他ならない。だからこそ、清めた後の柱に乗ることは問題無く、男たちは競って柱に乗りたがり、乗り切った男は英雄視されるんだよ。死んだところで、それは“聖なる結婚の儀式”の再現だから、祭りが中止になることもない。

ひかり：柱はヘブライ語で異教の神アシラだ、なんて言っていた人たちがいたけど、ユダヤ教は異教の神を認めないわ。だから、この祭りはユダヤに関係するものではないわよ。

建：つまり、シュメール由来なんだよ。そして、このようにフェニキアとも関わりが深い。

ひかり：フェニキアはとても重要だから、もっと教えて！

④都市

フェニキア本土の四大都市はテュロス、シドン、ビュブロス、アルワドである。聖書に於けるシドン人とは、およそカナン人あるいはフェニキア人の総称である。ヒッタイト時代にはシミュラ、ビュブロス、アルワドといったフェニキア北部の商都が利益を得ていた。

ビュブ罗斯はフェニキア海岸の主要都市の中で、青銅器時代初期から BC1,000 年紀まで切れ目無く人が住んでいたことが解っている唯一の都市で、ウガリトと並んで地中海東岸最大の商都だった。ビュブ罗斯は海岸の町トリポリスを経由して内陸への通路を使っており、BC2,000 年紀の初めには、エジプトを相手としたメソポタミア貿易の大きな玄関口となっていた。ビュブ罗斯の王たちは、自分たちで統治できるようになるまでは、女神から命令を受けていた。王は自分に祝福が与えられることを、そして末永くビュブ罗斯の王であることを、女神イナンナに祈願した。亦名はマリであり、これが転じて“マリア”となった。

マリはまた、ユーフラテス川中流の西岸にあった古代シュメール及びアムル

人の都市国家で、マリの最高神は西セム系の穀物神で嵐の神ダゴン（イシュクル）で、ダゴンに捧げられた神殿があったほか、豊穡の女神イシュタル（イナンナ）に捧げられた神殿、太陽神シャマシュ（ウツ）に捧げられた神殿もあり、シャマシュはすべてを見通す全能の神として知られていた。

.....
ひかり：聖書の語源となったビュブロス重要な都市だったのね。その主神が女神イナンナで、“マリア”の語源だなんて！

建：だから、イエスにまつわる話には、マリアという女性が登場する。母マリア、イエスの復活を最初に見たマグダラのマリア。特に、マグダラのマリアは後にヴァチカンの仕業で娼婦に仕立て上げられてしまったが、聖書のどこにもそんな記述は無い。しかし、仕立て上げられるような下地があった、ということさ。

ひかり：原型がイナンナだからね？

建：ああ。そして、マリではやはりイナンナと共にイシュクルとウツが祀られていた。特に、すべてを見通す全能の神の大元はエンキだったはずだが、ここでウツがその役割を担ったことが良く解る。

ひかり：太陽神・天照大神が最高神だというのは、このシャマシュが原型の 1 つなのね！

建：そして、言語学的にも。フェニキア語は北西セム語群カナン語グループの中では最も発達した言語で、後のアルファベットの発祥言語なんだが、フェニキア語は最初は縦書きにも横書きにもされた。しかし、やがて横書きが主流となり、読み書きの方向は右から左だったんだ。

ひかり：現在のアラビア語も右から左へ書くのは明らかにこの流れだと言えるけど、昔の日本語もそうよね！しかも、日本語には縦書きもあるから、日本語の根源の 1 つに、フェニキア語があってもおかしくないわ！

⑤文化

エジプトの外交文書であるアマルナ文書に依ると、テュロス、シドン、ベイルートといったフェニキア南部の都市はいずれも王家や議会、商船団を持ち、発達していた。フェニキア人は海のエンジニアとして古代から評判が高く、商業都市はすべて港が中心だった。そして、フェニキア人の軍隊と言えは海軍で、その軍船は速さと俊敏さで抜きん出ている。フェニキア人はかなり南まで航海しており、エジプト王ネコ（BC610－BC595）の命によるアフリカ周航に成功していた。当然、地中海沿岸地域はフェニキアの植民地とも言える状態で、リビア系フェニキア人（昔のカルタゴ＝現在のリビアの土地を植民地支配したフェニキア人）をポエニ人と言ひ、ポエニの産業は造船、兵器、漁業である。

これには、“海の民”が大いに関係している。BC13 世紀から 12 世紀に掛けて、“海の民”と称される外国人の侵入があった。しかし、海岸沿いのどの都市についても、大きな破壊や崩壊の跡は示されていない。また、キュプロスと同様、アシュケロンからアッコに至るパレスチナ沿岸諸都市も、“海の民”の侵入の跡、

BC12 世紀後半に急速に発展している。キュプロス島の“キュプロス”とは、古代ギリシャ語で“銅”という意味である。

エジプトが古くからビュブロスに関心を持っていたのは、レヴァントの木材（レバノン杉）が欲しかったからである。フェニキアは何よりも杉の取引を大事にしてきた。ヘブライの民が登場した時代、テュロスの神殿はソロモン王の興味をかきたて、フェニキアのエンジニアに目を付けた。旧約（列王記）では、フェニキア人は青銅で祭具を製作することや建物内部の装飾など、特定の仕事を請け負っている。ソロモンがフェニキア人に頼んだ 2 本の青銅の柱、ヤキンとボアズは、ヒラム王がテュロスのバアル・シャメム神殿に建てた記念碑的な一対が手本だった。

ソロモンの神殿建設は、テュロスと新興のイスラエル連合王国との通商協定の産物だった。ソロモンはテュロスに木材と専門技術（大工仕事、石積み、青銅工芸など）の提供を頼み、その見返りに、毎年かなりの量の小麦とオリーブオイルを提供し、更に銀で支払いを補った。つまり、イスラエルはテュロスの商業経験と技術的ノウハウの恩恵を受けた。そして、テュロスとイスラエルの関係は王家同士の婚姻によって更新され、強化された。分裂後のイスラエル王国の新しい首都はサマリアだった。なお、そのイスラエル連合には、フェニキア南部の後背地、テュロスやシドンなどの境界線まで含まれていた。

他にも、フェニキアから様々な国に渡った“渡りの職人”が古代社会に重要な役割を果たした。豪華な象牙細工は、フェニキアのお家芸とも言える特産品で、職人は同業組合ギルドのメンバーだった。フェニキアの金細工師の技術と名声は、旧約の中では不動のものだった。フェニキアの特徴として、装飾された金属鉢などの中央には必ず円形の部分、メダリオンがあり、ロゼッタか物語の一場面が描かれている。

他にもフェニキアの特産品があり、前述のアクキ貝という貝から抽出される紫の色素（テュリアンブルー、テュロス紫）、ガラスなどである。

.....
ひかり：フェニキア人の航海術は凄かったのね！

建：地中海やアフリカ周辺だけじゃない。アメリカ大陸など、世界中に広がっていたという説もあるよ。

ひかり：だとすると、ここまでの日本との類似性も考慮すれば、日本にも来ている可能性は大きいわね！

建：詳しくはまた後で教えるけど、実はエフライム族の大王がフェニキアの大船団と共に渡来した来たんだよ…。

ひかり：…そう言われても、もう驚かないわよ（内心ドキドキ！）…。

建：フェニキアの特産品のガラスは、イタリアのヴェネチアに渡ってヴェネチアン・グラスとして門外不出の技とされた。フェニキアから渡っていたことに因んで、ヴェネチアなんだ。その証拠に、ヴェネチアにはフェニーチェ劇場があり、これはフェニックス＝フェニキアを意味する。ヴェニスの人というの、フェニキアが最大の商業国だったことに由来するんだよ。

そして、イタリア人はパスタやピッツアの粉モノが好きだし、おしゃべり好きで、黙ってられない。

ひかり：人生楽しく陽気に、だし、フェニキアは商業が盛んだったという点は…えっ、これって、…大阪人？！

建：イタリア人と大阪人は、絶対に祖先がフェニキア人に間違いない！だから、大阪は商人の町になったんだよ。その決定的な証拠が住吉大社さ。海神を祀るし、本殿が西を向いてるのは、故郷のフェニキアが西にあるからさ。

ひかり：大阪とイタリアとフェニキアの関係、よ〜く解ったわ。ところで、ソロモンの神殿が、材料的にも人材的にもフェニキア人に依るものだというのは、新たな発見だわ！

建：ようやく気付いたの？

ひかり：だって、てっきりユダヤ人の技術だと思っていたわよ！

建：それは、聖書を先入観で読んでいるからだよ。

ひかり：だとしたら、日本の職人技の凄さも、実はフェニキアのエンジニアに由来するものなんでしょうね…。

建：そういった技術の根本は当然シュメールだし、フェニキアの高細工技術の凄さこそ、シュメールの影響を大きく受けている証拠だと言えるね。

⑥宗教

a：

フェニキアの宗教の世界に於いては、最高の社会的地位にある女性は最高の地位に就くことができ、神官長や神官会議の長にもなれた。都市の神殿は職業的神官によって運営されており、こうした地位が王家と深く結び付いていた。王自身か直近の親族（妃の母親も含む）がしばしば神官あるいは女性神官＝巫女として、その都市の主神に仕えていた。このような神官職は、大体貴族社会で世襲されていた。

フェニキア人の王の権力と威光は、その神聖なる役割、すなわち、神と人との仲介者であったことと深く結び付いていた。王の名前の多くがバアル、エシムン、メルカルト、アシュタルテといった神の名を冠しているのも、その結び付きの深さの象徴であり、神々に対する敬意の表れでもある。

神の呼び名は大抵総称的で、例えばバアルは単に“主人”とか“かしら”という意味で、固有名詞ではない。バアル像を統合すると、嵐の最高神とフェニキア神界の首領という二面性が見られる。地方版のバアルは、神聖な山や岬と結び付いており、特にサポン山はその嵐の神の本拠地だった。ウガリトの神話では、そこに宮殿のような住まいがあったという。

特に、天地創造はエル（とダゴン）によって行われたとされている。エルはセム語で“神”の意味だが“人類の父”と呼ばれ、ダゴンは“穀物”を意味した。

.....
ひかり：女性の地位が確立されていたなんて、立派な国ね。

建：古代日本と同じさ。卑弥呼とトヨが女王に立っただろ？

ひかり：そういうところにも、フェニキアの影響があるわけね…。

建：バアルは元々は嵐（風）の神エンリルだった。その息子イシュクル（アダド）がトルコ～シリア、レバノン付近を治めていたので、雷神イシュクルも嵐の神となる。後に、マルドゥクが乗っ取りをしてから、バアルとはヘブライ語でマルドゥクを意味するようになったんだ。

ひかり：だから、聖書ではバアルが忌み嫌われているわけね！

建：エルはエンキ、ダゴンとはニンギシュジッタだよ。ニンギシュジッタはニビルから帰還する際、小麦を持ち帰ったから“穀物”として象徴されている。

b：

ビュブロスではバアラト・ゲバル（＝ビュブロスの女主人）への信仰が盛んで、その相方の男神バアル・シャメム（＝天の主）への信仰もずっと行われていた。シドンの主神はアシュタルテとエシュムン、ウガリトの最高神はエル、キティオンでは“矢の王”と呼ばれたセム族の神シェドである。中でも、メルカルト、エシュムン、アシュタルテが最も崇拝された。

バアラトは母性と豊饒性を持ち合わせ、後にギリシャのアフロディーテになった。

アシュタルテの通称はシェム・バアル（＝バアルの名前）という意味で、天界と海の神、多産や生殖力の神、戦いの神でもあった。アシュタルテは 2 頭のスフィンクスが支える玉座とも結び付いている。

願掛けや念願成就の際には、神殿に様々な品が奉納され、青銅製やテラコッタの礼拝者か神の像が圧倒的に多く、特にアシュタルテに捧げられた。フェニキア領内では、天然の洞窟や岩屋にもアシュタルテが祀られ、中にはワスタの岩屋のように、女性器を表した落書きで飾られている所もあった。これらアシュタルテを祀った多くの洞窟が、後に聖母マリアの神殿に発展した。

ひかり：本来の最高神はエルでも、普段関わりの多い重要な神はイナンナなのね。「生命の樹」で言えば、慈悲の柱！

建：良かったです！世界中に残る女性器の図柄はイナンナ由来で、アシュタルテを祀った洞窟がマリア神殿に発展したことは、マリアの原型がイナンナであることを裏付ける。

ひかり：そして、アシュタルテは天界と海の神だからイナンナにも海の神の性質があって、2 頭のスフィンクスが支える玉座とも結び付いているのなら、狛犬のある神社で祀られる神そのものね！

建：シヴァの化身ドゥルガーそのものだね。

c：

フェニキアでは各都市が“神々の 3 人家族”に支配されていたとした。母なる神、父なる神、その息子であり、息子は植物の神で、その死と復活が農業の年周期と結び付いていた。どの神々のカップルに於いても、男神が“死と復活”

の概念と結び付いている。テュロスでは“メルカルトの目覚め”が、毎年国民的祝祭として定着していたが、これは死と儀式的な火葬の後にメルカルトが復活することを再演する春の儀式である。メルカルトとは、ミルク・カルト（＝都市の王）という意味である。また、同様な儀式がビュブロスにもあった。特にビュブロスでは、毎年アドニス祭が行われていた。これはギリシャ神話の影響だが、アドニスは獰猛な猪に殺され、1年の半分ずつを生の世界と死の世界で生きることを余儀なくされた。このアドニスという名前はセム語のアドン（＝主人）もしくはアドーナイ（＝私の主人）に由来する。また、シドンの神エシムンも“死と復活”の神として信仰された。どの神の場合にも、復活には相手の女神が“聖婚”の儀式を通して一役買っていた。メソポタミアのアキツ祭にも類似の儀式がある。

フェニキア人の1年は、農業の周期と連結した宴と祭りに支配されていた。特に、新年や収穫の祝いには、生贄が捧げられた。月日は新月の日から計算され、太陽と月への崇拝が暦に大きな役割を果たしていた。最大の年中行事が“春の目覚め”で、テュロスではメルカルト、シドンではエシムンの復活祭であった。メルカルト祭（2月か3月）では、メルカルトの人形が儀式用の薪で焼かれ、その後、相方のアシュタルテとの儀式的な結婚＝聖婚を通じて復活祭が行われた。古くから神殿売春の習慣があったが、これはアシュタルテ信仰と結び付いていた。

.....
ひかり：つまり、メルカルト＝エシムン＝アドニス＝ドゥムジね？！

建：うん、そして、獰猛な猪はマルドゥクの象徴だよ。さっきのアドニスの話では、アドニスは木となったミュラーから美の女神アフロディーテが取り出したことになっていたよね？それが“植物の神”として象徴され、農業の周期と関連した宴や祭りとなっているんだ。

ひかり：この儀式的な火葬は…

建：マルドゥクの乗っ取りの影響に決まってるじゃん！

d：

羊と子羊が生贄にされ、豚は生贄としても食用としても忌み嫌われていた。また、香を供えたり焚いたりすることが、重要な生活習慣だった。

信仰には、神の存在やその場所を示す種々のシンボルが使われたが、いずれも人間や動物の形をとらない非偶像的なものであった。

シドンのエシムンはバアルの地域版とも言えるが、“シムン”は“油”を意味し、癒しの神としても崇められ、また、泉や聖水とも深い結び付きがあった。

.....
ひかり：これって、聖書そのものじゃないの？

建：そうだよ。ヘブライの民が歴史に登場する以前の話だからね。オリジナル

はこちらさ。

ひかり：聖書ではカナンの地域は偶像崇拜の地とされているけど、実際は違うんだ。

建：こういう点を良く理解しないので、聖書に書いてあるから、と言って攻撃を仕掛けて正当化しようとしてきた。それが、中東の混乱の原因なんだ。

ひかり：泉や聖水とも深い結び付きがある癒しの神エシュムンは、その性質からすると、本来はエンキでしょ？

建：良いね、理解が深まってきて…。それが、息子のドゥムジへと変化した。そして、ニビルではアヌの前に出る際に、体を油で清めた。エンキは水瓶を持って洗礼する象徴でもあるが、この洗礼が“油”を掛けて聖別する風習へと変化したんだよ。

ひかり：日本では油で聖別しないけど…。

建：本来は、清浄な水で行えばいいんだ。日本には清浄な水が豊富にあるからね。

e：

男性神官は髭を奇麗に剃り、儀式的な剃髪が重視されており、女神への信心の証として頭を剃った。裸足で、つばの無いぴったりした帽子を被り、足下まである長い亜麻布の神官服を纏っていた。前の方にはプリーツがたたまれ、袖はゆったりとして、左の肩には神官の印である薄い布を折りたたんだストールが掛かっていた。カディスという土地でのメルカルト神殿では、神官は白く緩やかなローブを纏い、頭髪を剃り、性的禁欲を守った。

フェニキア人は死後の世界を信じており、死者をレパイムと呼んでいたが、これは神である祖先、あるいは神となった死者、を意味し、その語源は“癒す、回復する”という意味である。マルツェ（ポエニ語で“再会の場”の意）と呼ばれる宗教的な親睦会では、神格化された祖先（レパイム）を讃える儀式的な食事が行われた。その祝宴では、供物や生贄が捧げられ、大酒を飲んだ。

ひかり：この神官の格好って、日本の神職のものと類似しているわね？

建：ユダヤの神官由来、と言っていた人がほとんどだったが、そのユダヤの神官もフェニキアが根源なんだ。ここでは神官が頭髪を剃っていたが、これはエジプトの影響で、フェニキアはエジプトとの交易が盛んだったことから、宗教的な影響も多大に受けているんだ。フェニックス伝説もそうだろう？この頭髪を剃る大元は…

ひかり：アダパがニビルに連れて行かれる前に、ボサボサの髪が剃られたことね！で、これが仏教に受け継がれた。性的禁欲を守ることと共に。

建：（にっこり頷く。）そして、マルツェは神道の直会と同じだね。

ひかり：日本の神道以外にも、“神である祖先”“神となった死者”という考えがあったなんて、驚きだわ！一神教では、死者が神になるなんて、言語道断よね？

建：この点からも、神道の根源はフェニキアにある、と言える。ユダヤ、ユダヤ、と言っていた人たちは、大いに反省してもらいたい。

f：

神殿の形態には2つあって、1つは露天の聖域と、もう1つは屋根や壁のある建物の神殿である。露天の代表が旧約のバマー＝“聖なる高台”で、大抵は舗装された吹きさらしの、一段高くなった方形の中庭“テメノス”で、そこにベテウルや祭壇などの礼拝設備があった。

フェニキアでの最大の露天聖域は、シドン郊外のボスタン・エシュ・シェイクにあるエシュムン神殿である。そこには水路と溜池による精巧な給水設備があり、清めの儀式が行われる場所だった。水に関する儀式は、フェニキア人の治癒力信仰に於いて、重要な役割を果たしていた。

アシェラと呼ばれる奉納用の小さな木製の柱は“聖なる森”の、ベテウル（セム語で“神の家”）と呼ばれる高さ1.5メートルほどの一本石柱は神の存在と座のシンボルだった。ベテウルは祭壇か供物台の前など、神殿の中心に据えられ、旧約ではマッセバ（仕上げをした石）と呼ばれている。

.....

建：方形は陰陽、すなわちカバラでは地を表し、陰だ。そこに、神の依り代としてベテウルを立てた。この場合、ベテウルは陽となる。そのベテウルに神が天から降臨するならば、ベテウルは地と一体化した柱で陰であり、天から降臨する神は陽だから、神が降臨して陰陽の合一となる。すなわち、ベテウルは場合によって、あるいは見方によって陰にも陽にも成り得るということ。また、方形は陰なので、陰の象徴の水が関わる。この場合の、治癒力信仰に於いて重要な役割を果たす水とは、イナンナが“復活”する際に与えられた「生命の水」に他ならない。ここでも、やはり清浄な水が重要なんだよ。

ひかり：何だかややこしいけど…。

建：ここで登場した奉納用の小さな柱アシェラは、主にイナンナに捧げられたんだ。だから、イナンナがアシェラとも呼ばれるようになり、神の数え方は柱で数える。その原型はイナンナなんだよ。

ひかり：その柱の原型は、イナンナが掛けられた木？

建：そうだ。天神は男神・女神に関わらず陽の扱いとなる。だから、イナンナは陽、掛けられた木は陰となる。しかし、男神・女神という点だけ見れば、イナンナは女神だから陰となる。つまり、一柱の神が陰にも陽にも成り得るということさ！

ひかり：ますますややこしいけど、そのような見方なら、根源神が陰にも陽にも成り得るという考え方は理解しやすいわね…。ということは、海宮一族で極秘伝とされた、根源神は陰にも陽にも成り得る、て…？

建：まあ、そういうことだね…。

ひかり：じゃあ、このベテウルって、心御柱（しんのみはしら）の原型？

建：その通り！その海宮一族のお社の下に打ち込まれている心御柱は八角柱で、時の天皇の背の高さと同じだったという。それが、神宮の心御柱の大元なん

だ。

ひかり：それはどういうこと？

建：大王が神から寵愛を受け、王権を授かるということさ。

ひかり：ふへん、フェニキアの宗教って、本当に神道にそっくりね。ところで、このベテュルは旧約のベテルで、創世記の“ヤコブの夢”に登場するものよね？

建：そう、その原型もこれなんだ。

“ヤコブはベエル・シェバを発ってハラシムへ向かった。とある場所に来た時、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を1つ取って枕にし、その場所に横たわった。(中略)ヤコブは眠りから覚めて言った。

「真に主がこの場所におられるのに、私は知らなかった」

そして、恐れおののいて言った。

「ここは、何と畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ」

ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立てて先端に油を注ぎ、その場所をベテル（神の家）と名付けた。因みに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた。ヤコブはまた、誓願を立てて言った。

「神が私と共に居られ、私が歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主が私の神となられるなら、私が記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたが私に与えられるものの1/10を捧げます。」

旧約のベテルの原型がベテュルであって、ベテルからベテュルが派生したのではない。そもそも、聖書はフェニキアのビュブロスで編纂されたからね。しかも、ヤコブの亦名はイスラエルだから、イスラエル王国となった十支族はベテルに関係が深い、つまり、心御柱に関係が深いと言えるのさ。

また、この文章の中の“記念碑として立てて先端に油を注ぎ”の“立てる”の原語が“マッセバ”なんだ。これは、ヒンズー教でリングの先端にミルクやギー、胡麻油などを掛けることと同義で、その根源はシヴァ神＝イナンナだよ。

g：

硬貨などに刻まれたフクロウはギリシャの女神アテナのシンボルで、その影響を受けている。硬貨の図案としては他に、半人半魚の海神、翼のある女神ニケと四頭立て戦車、馬、ヤシの木などがある。この女神と馬、ヤシの木は三大モチーフとも言うべきものである。

また、フェニキアにも印章があり、蓮の花やスカラベなど、再生や復活と結び付いたエジプト的要素が見受けられる。図象としては、4つの翼を持つ悪魔が多用された。

.....
ひかり：アテナ＝ニケ＝イナンナで、半人半魚の海神はオアンネスことエンキよね？

建：だから、フェニキアでもエンキの影響は大きい。何しろ、“海の民”が深く関わっているからね。

ひかり：イナンナとナツメヤシに加えて馬が三大モチーフなら、イエスが降臨する際に乗って来るとされた白馬や神社の絵馬の原型はフェニキアなの？

建：そうなんだ。神宮でも毎月 1 の付く日に神馬が参拝するのは、本当の最高神は誰なのか、暗示しているとは思わないかい？ちなみに、神宮で最も位が高いのは大宮司や祭主ではなく、神様が乗るとされるその神馬なんだよ。

ひかり：フェニキアの印章にはエジプトの影響が見られるわけだけど、元々の再生や復活の概念はイナンナ由来なのを、マルドゥクが利用したためよね？

建：言うまでもないことさ。

ひかり：4つの翼を持つ悪魔って、何なの？

建：ポエニ人（カルタゴ）には母都市テュロスの信仰が持ち込まれ、初期の最高神はメルカルトだったが、後にアシュタルテ＝イナンナが変化した翼のあるタニトが信仰された。4つの翼を持つ悪魔はカバラとしては神の戦車メルカバーだが、イナンナ＝タニトがそれぞれ2つの翼のある姿ならば、その暗黒面を象徴したのが4つの翼のある姿とも言える。

⑦火葬と生贄

a：

動物の生贄（羊か子羊）は神官か執行人によってうやうやしく祭壇へと運ばれ、その後ろから生贄の提供者と祭具（斧、ナイフ）の運び人が付いて行く。生贄は血を抜かれ、切り落とされた頭部が祭壇に供えられる。生贄が焼かれる間、供犠の祈りが唱えられ、脂肪と内臓が焼き尽くされると肉が切り分けられ、執行人と提供者に分配される。執行人は胸と右の腿肉を取り、提供者は残りの肉と皮を取る。その後、生贄の灰が埋められ、そこに奉納の石柱が建てられる。

BC1,000 年紀のどこかの時点で、新しい埋葬法である火葬が、フェニキア本土と近隣のシリア、パレスチナを含んだレヴァント海岸に出現した。テュロスでは BC10 世紀には既に火葬が行われていた。

.....
ひかり：ユダヤ教の生贄とそっくりだわ！火葬と言えばヒンズー教よね？

建：ヒンズー教では、魂は焼かれることによって天に登り、遺灰を近くの川に流すことで自然に還り、新しく生まれ変わることができると思われている。この考えは、フェニックスと同じだ。フェニキアもインダスも創造神はイナンナだから、基本的に同じ考えとなる。また、暑い地域では遺体はすぐに腐敗して不衛生だから、火葬のような埋葬法が出現したとも言える。フェニキ

アとインダスのどちらがより古い起源なのかは、今度、イナンナ様に聞いてみるよ。

ひかり：いずれが起源にしても、“アシュタルテに生贄として捧げられた聖王の
霊魂＝鳥が火葬の炎から再生して天界へ飛翔する”という発想は、火葬
が出現した後よね。

b：

フェニキアでは死者はネクロポリスという共同墓地に葬られ、子供の生贄を
埋葬したとされるトペテが存在した。特に、ポエニには悪名高い生贄の儀式が
あった。

トペテの埋葬地から発掘された骨壺からは、生贄は 3 歳未満の幼児で、未熟
児が多かった。ボロボロの灰になるまで焼かれているので、性別は不明である。
明らかに未熟児や新生児が多く、大人の墓地には赤子がほとんど埋葬されてい
ないことなどから、死産児や病気で死んだ子供という可能性もある。しかし、
様々な文書や、墓自体と添えられた墓標には“バアル・ハンモンとタニトにモ
ルクを供える”と記されていることから、この儀式は実際にあったとされてい
る。

“モルク”とは子羊の供物を指すが、修飾語の“b’l”が人間の埋葬を意味し、
ポエニ語の“願掛け”や“誓願”に相当する“ndr”という語が頻繁に見られるこ
とから、普通の墓石とは明らかに性質の異なるものであることが伺われる。そ
して、他の墓地が何度か移転しているにも関わらず、トペテだけは決められた
場所から動かず、不可侵であることも、特別な意味を持っている。

旧約では、預言者たちが幼児の生贄を激しく非難していることから、実際
にあったのだろう。このような生贄の儀式は、商人、神官、市の執政官など上
流階級が行っていたが、ローマ帝国によって廃止されたものの、北アフリカで
は AD1 世紀になっても密かに継続されていた。

.....
建：トペテに奉納された石柱の中で祈りが捧げられている神はタニトだよ。

ひかり：そうすると、イナンナがそんな子供の生贄を望んでいたわけ？！

建：そんなことはないだろ？その“誤解”の原因は…

ひかり：マルドゥクに依る乗っ取りね！

建：最初は病気の新生児や未熟児だったのだろう。それが次第に誤解され、幼
子が供されるようになったのだろう。

ひかり：(涙を浮かべて) 可哀想すぎる…。

建：そして、後の裏の世界支配者たちの間でも、このような生贄は継続された。

ひかり：彼らが神への生贄を？

建：まさか！人間の生贄を好むのは、さっきも話したように、悪い想念によっ
て創り出されたエネルギー体、サタンさ。

ひかり：フェニキアは偶像崇拝ではなかったけど、後に一部でこのようなこと
が成されたから、聖書では批判されているのか…。

(5)ここまでの流れ

建：このように、今まで日本に於いてユダヤ教由来だと見なされていたことが、かなりの部分、フェニキア由来だということが解っただろ？

ひかり：特に、神道の根源に関わる部分は、フェニキアの影響が極めて大きいわよね。言い換えれば、それはシュメール！

建：ここまでの流れをまとめると、どうなる？

ひかり：核戦争後に生き残ったシュメールの一族は、一方はウリムから“フルリ、フル”が進出してミタンニとヒッタイトを建国し、一方の王家で神官の家系のイブル・ウム一族は“海の民”となって、ヒッタイトから侵入した“海の民”と共にフェニキアで合流したのね。そして、著しく発展し、“小さなシュメール”という意味の北イスラエル王国ショムロン（サマリア）が建国されたのね、カナンの地に？

建：ああ。

ひかり：そこにはニブル・キ出身でウリムの王の血も引く神官で王族の末裔、イブル・ウム一族が居たから、その末裔が後のサマリアの大王家エフライム族となり、そこから分家した一族はいわゆるユダヤの十二支族だけど、北と南は元々仲が悪く、盗賊の首領、ダビデが何とか取り持って統一王国ができたものの、息子のソロモンの時代には崩れ去った、てことよね？

建：その通り！

ひかり：で、サマリアでの主神はイナンナ、ウツ、そして主エンキよね？

建：良くてきました！そこに、イナンナ、ウツと兄弟のように仲の良かったイシュクルも加わる。

ひかり：更に、天才科学者ニンギシュジッダがカバラを考案して様々なヒントを残してくれた！

建：うん。そして、神々との通信装置でもある“主との契約”を表す契約の箱、神々の依り代で王権の象徴でもあるアロンの杖、ニビルと豊穡を象徴する黄金のマナの壺が三種の神器として、いわゆるヘブライの民に授けられた。後に、アッシリアやバビロンに因る侵攻で十支族が散った時、アロンの杖は大王家のエフライム族が、マナの壺は神の数字をシンボルとするイスラエルの7番目の息子の系統ガド族が継承したが、契約の箱は南ユダ王国に置かれた。契約は正義と律法のウツのシンボルでもあり、エルサレムはウツが管轄していたからだよ。

その後、エフライム族はフェニキア人の大船団と共に日本の地へと渡来した！特に、フェニキア人は地中海沿岸を占拠していたから、エジプトとの関係は極めて深いので、エジプト人の渡来かと間違えしまうこともあるんだよ。

ひかり：こんなこと、今まで誰も気付いていなかったわね！それにしても、膨大な内容で…何かこう…

建：じゃあ、今日はここまでとしよう。